

高等学校における教科指導の充実

地 理 歴 史 科

新学習指導要領における
改善事項を踏まえた「地理」の指導

栃木県総合教育センター
平成22年 3 月

ま え が き

総合教育センターでは、基礎・基本の確実な定着を図るための授業改善を目指して、教科指導の在り方について研究し、その成果を普及することにより、生徒の学力の向上に資することを目的に、平成17年度より、「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」に取り組んでいます。

近年の教育課程実施状況調査や学力に関する国際的な調査では、日本の児童生徒の学力の状況や学習に対する意識などが明らかにされ、文部科学省等からも学力向上のための様々な対策が打ち出されたり提言がなされたりしています。

また、平成19年12月に公表された、OECD生徒の学習到達度調査（PISA2006年）では、科学的リテラシーをはじめ、数学的リテラシー、読解力のそれぞれについて問題点が指摘されています。

さらに、平成20年12月には、国際教育到達度評価学会（IEA）が行った国際数学・理科教育動向調査の2007年調査（TIMSS2007）の結果が公表され、学力低下に歯止めがかかったという分析がある一方で、パターン化された指導の弊害とも見られる結果も一部に見られ、思考力の育成に課題があることも指摘されています。

これらの調査の分析結果を踏まえ、中央教育審議会答申を経て、平成21年3月には、高等学校の新学習指導要領が公示されました。数学と理科が24年度から、国語、地理歴史、公民、外国語が25年度から学年進行で実施されます。今回の改訂の主な改善事項として、「言語活動の充実」、「理数教育の充実」が示されました。これらは、先に挙げた各種調査で、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題、知識・技能を活用する問題に課題が見られたことなどに対する改善策でもあります。

本調査研究においては、今年度、国語科、地理歴史科、数学科、理科、外国語科（英語）の各教科で、各種調査の結果から指摘されている課題と新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえ、その解決を図るための授業改善について取り組みました。研究の成果をまとめた本冊子を有効に御活用いただければ幸いです。

最後に、調査研究を進めるにあたり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成22年3月

栃木県総合教育センター所長

瓦 井 千 尋

目 次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
事例1 地域の自然環境と防災（地理A）・・・・・・・・	6
事例2 地図の読図から言語活動への展開（地理B）・・・・・・・・	19
事例3 作業的な学習から言語活動への展開（地理B）・・・・・・・・	31
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	43

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。

「とちぎ学びの杜」 <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

新学習指導要領における改善事項を踏まえた「地理」の指導

はじめに

1 調査研究の背景

平成21年3月9日に、新しい高等学校学習指導要領が告示された。今回の改訂のポイントとして、次のように、**言語活動の充実、学習習慣の確立**が挙げられる。

＜高等学校学習指導要領 第1章 総則（抜粋）＞

第1款 1 学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

第5款 5 教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項

(1) 各教科・科目等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。

新学習指導要領の改訂に際しては、「OECD生徒の学習到達度調査（PISA調査）」や、文部科学省が小学校第6学年と中学校第3学年を対象に行った「全国学力・学習状況調査」など、各種の調査から明らかにされた、次のような課題が反映されている。

- ①思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題（無答率が高い）が見られる。
- ②読解力で成績分布の分散が拡大（成績中位層が減り、低位層が増加）している。
- ③家庭での学習時間の減少など、学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題が見られる。
- ④自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題が見られる。

特に、教科の指導においては、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させること、知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することが重視されている。その実現のためには、「習得・活用・探究」のバランスを取った学習活動の展開が重要である。このことについて、新学習指導要領には、改訂の基本方針として次のように述べられている。

＜高等学校学習指導要領解説 第1章 総説 第2節 改訂の基本方針（抜粋）＞

②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること。

確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。

このため、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること、さらに総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることなどにより思考力・判断力・表現力等を育成することとしている。

また、これらの学習を通じて、その基盤となるのは言語に関する能力であり、国語科のみならず、各教科等においてその育成を重視している。さらに、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣を確立することを重視している。

なお、学習指導要領の改訂に先立って発表された中央教育審議会答申には、言語に関する能力を育成するための、各教科における言語活動として、以下のような具体例が示されている。

＜平成20年1月中央教育審議会答申（抜粋）＞

- ・観察・実験や社会見学のレポート作成において、視点を明確にして、観察したり見学したりした事象の差異点や共通点をとらえて記録・報告する。（理・社）
- ・比較や分類、関連付けといった考えるための技法、帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する。（数・理）
- ・仮説を立てて観察・実験を行い、その結果を評価し、まとめて表現する。（理）
- ・体験活動を振り返り、そこから学んだことを記述し、まとめたものを発表し合う。

（特別活動・総合的な学習の時間）

- ・討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする。（特別活動・総合的な学習の時間）

これらのことから、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各種調査等から指摘されている課題について、その解決を図るための教科指導の工夫改善を目指して調査研究に取り組んだ。3回の調査研究委員会を通して、評価の観点を踏まえた教科指導の在り方について、各教科ごとに研究協議を行った。本書はそれらの取り組みについて、授業実践を中心に報告するものである。

※本冊子の中では、平成11年3月に告示された学習指導要領を「現行の学習指導要領」、平成21年3月に告示された学習指導要領を「新学習指導要領」として記す。

2 地理における新学習指導要領への対応

平成20年3月に告示された学習指導要領の地理歴史科と公民科は、平成25年度入学生から年次進行で実施される。今回の改訂においては、地理歴史科と公民科を併せた主な改善事項として、「中学校社会科との関連の考慮」、「知識、概念や技能の活用」、「言語活動の充実」の三つが示されている。

また、地理歴史科に絞った改善の具体的事項としては、「地理歴史科各科目間の関連の重視」、「知識、概念や技能の活用」、「地図活用の重視」の三つが内容改善の柱となっている。

高等学校地理改訂の要点

(1) 地理Aの改訂の要点

ア 地理Aの目標

現代世界の地理的な諸課題を地域性や歴史的背景、日常生活との関連を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

新しい「地理A」の目標は、現行のそれと比べて「歴史的背景、日常生活との関連」という文言が付加された点が大きく変わっている。

イ 地理Aの改善に関する具体的事項

「地理A」については、防災などの生活圏の地理的課題に関する地図の読図・作図及び地域調査などの作業的、体験的な学習を充実し、実生活と結び付いた地理的技能を身に付けさせるとともに、環境、資源・エネルギー問題などの現代世界の諸課題や持続可能な開発の在り方などについて地域性や歴史的背景を踏まえて考察させ、地理的な見方や考え方を培うことを一層重視する。

今回の改訂においては、実生活・実社会とのかかわりをより強く意識して、地理の実用性・有用性を前面に出すという方向性が示されている。

ウ 地理Aの内容構成等の改善

〈新〉	〈現行〉
(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察 ア 地球儀や地図からとらえる現代世界 イ 世界の生活・文化の多様性 ウ 地球的課題の地理的考察	(1) 現代世界の特色と地理的技能 ア 球面上の世界と地域構成 イ 結び付く現代世界 ウ 多様さを増す人間行動と現代世界(選) エ 身近な地域の国際化の進展
(2) 生活圏の諸課題の地理的考察 ア 日常生活と結び付いた地図 イ 自然環境と防災 ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査	(2) 地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題 ア 世界の生活・文化と環境 (ア) 諸地域の生活・文化と環境 (イ) 近隣諸国の生活・文化と日本 イ 地球的課題の地理的考察 (ア) 諸地域から見た地球的課題(選) (イ) 近隣諸国や日本が取り組む地球的課題と

新しい「地理A」では選択項目が廃止されたが、学習内容としては共通するものが多く、現行と同様に、作業的・体験的学習をふんだんに取り入れて地理的技能を育成するとともに、主に主題的な方法を基に学習できるような項目構成となっている。また、今回の改訂で重視されている課題を探究する学習として、大項目(2)の最後に「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」を設けている。地域の国際化にかかわる問題に限定せずに生活圏における地理的な課題を探究し、日常生活と結び付いた地理的技能及び地理的な見方や考え方を身に付けさせることとしている。

(2) 地理Bの改訂の要点

ア 地理Bの目標

現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

新しい「地理B」の目標は、現行のそれと比べて「現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて」という文言が付加された点が大きく変わっている。

イ 地理Bの改善に関する具体的事項

「地理B」については、現代世界の自然環境、資源、産業、人口、都市・村落、人種・民族などに関する地理的事象の分布やその要因などについて体系的に考察させるとともに、それらの学習で習得した知識、概念や地理的技能を活用して、世界諸地域の地域的特色を歴史的背景に留意して多面的・多角的に考察させ、地理的な見方や考え方を培うことを一層重視する。

今回の改訂においては、系統地理的考察と地誌的考察を並列の関係ではなく、習得―活用―探究という学習プロセスを踏まえて、地誌学習に重点を置くことが示されている。

ウ 地理Bの内容構成等の改善

〈新〉	〈現行〉
(1) 様々な地図と地理的技能 ア 地図情報と地図 イ 地図の活用と地域調査	(1) 現代世界の系統地理的考察 ア 自然環境 イ 資源、産業 ウ 都市・村落、生活文化
(2) 現代世界の系統地理的考察 ア 自然環境 イ 資源、産業 ウ 人口、都市・村落 エ 生活文化、民族・宗教	(2) 現代世界の地誌的考察 ア 市町村規模の地域 イ 国家規模の地域 ウ 州・大陸規模の地域
(3) 現代世界の地誌的考察 ア 現代世界の地域区分 イ 現代世界の諸地域 ウ 現代世界と日本	(3) 現代世界の諸課題の地理的考察 ア 地図化してとらえる現代世界の諸課題 イ 地域区分してとらえる現代世界の諸課題 (中略) ク 民族、領土問題の地域性

大きな変更点として、現行の大項目(3)に代わって、新「地理B」では大項目(1)が加わった。現行の大項目(3)における項目間選択は、基礎的・基本的知識、概念や技能の習得の観点から、内容として示された項目を履修者全員が共通に学習できるようにするため廃止された。新たに加わった大項目(1)は、中央教育審議会の答申にある「地図活用の重視」という指摘を踏まえたものである。

もう一つの大きな変更点は、三つの大項目に指導の順序性が示されたことである。初めに大項目(1)で地図に関する基礎的・基本的な知識や技能を学ばせ、それを基に現代世界の諸課題についても大観する大項目(2)を学ばせる。その上で、「習得」した学習の成果を「活用」して、今回の改訂で重視されている課題を「探求」する学習を含む、現代世界の諸地域の特色や諸課題について学ばせる大項目(3)へと結び付けている。

本調査研究について

本調査研究では、新学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、研究協力委員が勤務校で担当する各科目において、地図を十分に活用するとともに、読み取ったり考察したり話し合ったりしたことを言葉や文章で表現するなどの言語活動の工夫を取り入れた「地理」の指導の改善に取り組んだ。それによって、習得した知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の育成を図ることを目指した。なお、現行の学習指導要領においても、「各科目における指導計画の作成と内容の取扱い」において、「地図や年表を読みかつ作成すること」や「観察、見学及び調査・研究したことを発表したり報告書にまとめたりすること」などの様々な学習活動を取り入れることが求められており、各事例は、現行の学習指導要領の趣旨にも合致するものである。

各事例の実践内容は次のとおりである。

事例1 地域の自然環境と防災（地理A）

学校の周辺地域について、複数の地図を重ね合わせ、防災の視点から読み取れる事実やそこから考えられることを筋道立てて発表させることで、地理的な技能や思考力、表現力を身に付けさせることを目指した。

事例2 地図の読図から言語活動への展開（地理B）

地図から読み取れることを説明したり、考察したことを根拠を明らかにして記述したりする学習活動を通して、地理的な見方や考え方を身に付けさせるとともに表現力の育成を目指した。

事例3 作業的な学習から言語活動への展開（地理B）

グラフや地図を作成する作業的な学習と、そこから読み取れることや考察したことを表現する言語活動をあわせて行い、地理的な技能や思考力、表現力を育成することを目指した。

＜研究協力委員＞

栃木県立宇都宮清陵高等学校	教 諭	樋 山 賢 一
栃木県立真岡工業高等学校	教 諭	高 久 順
栃木県立矢板東高等学校	教 諭	見 目 亘

＜研究委員＞

栃木県総合教育センター 研修部	指導主事	阿久津 如 子
-----------------	------	---------

事例 1 地域の自然環境と防災（地理 A）

1 ねらい

今回の学習指導要領の改訂において、「地理 A」は、実生活・実社会とのかかわりをより強く意識して、地理の実用性や有用性を前面に出した内容構成となる方向性が示され、大項目「(2) 生活圏の諸課題の地理的考察」の中に「イ 自然環境と防災」という中項目が新設された。ここでは「自然環境の特色と自然災害とのかかわりについて理解させるとともに、国内にみられる自然災害の事例を取り上げ、地域性を踏まえた対応が大切であることなどについて考察させる。」ことがねらいとされている。

これを踏まえて、本事例では、学校の所在市を題材として、生徒が作図した複数の地図を重ね合わせ、そこから防災の視点で読み取れることや考えられることを話し合い、その結果についてプレゼンテーションを行う、という一連の学習活動を行った。これを通して、作図や読図などの基本的な地理的技能を身に付けさせるとともに、思考力や表現力を育成したいと考えた。

また、新学習指導要領の「3 内容の取り扱い」では、内容の全体にわたる配慮事項として、「地理的な見方や考え方及び地図の読図や作図、衛星画像や空中写真、景観写真の読み取りなど地理的技能を身に付けることができるよう、系統性に留意して計画的に指導すること。その際、教科用図書『地図』を十分活用するとともに、地図や統計などの地理情報の収集・分析には、情報通信ネットワークや地理情報システムなどの活用を工夫すること。」があげられている。そこで本事例では、地理情報システムの考え方を取り入れて、パソコンを使わずに複数の地理情報を重ね合わせる手法を実践した。

なお、実践は第 1 学年を対象に行った。

2 授業実践

(1) 実践のねらい

- ・地域の自然環境と防災に関する複数の透明シートや地図を作成し、それらを重ね合わせて、必要な情報を読み取ることができる。
- ・地図から読み取れることについて話し合い、意見（仮説）をまとめることができる。
- ・自分たちの意見（仮説）やその根拠について、他者にわかりやすく伝えることができる。

(2) 指導計画（3 時間）

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
1	・ 7～8 人ずつ 5 班（A 班～E 班）に分かれ、班ごとに異なる透明シートを作成したり地図を着色したりする。		・ 地域の自然環境と防災に関する透明シートや地図を適切に作成している。 【知識・理解】 〔透明シート、地図〕
2	・ A 班から E 班のメンバーが最低 1 人含まれる、新しい班（1 班～8 班）を作る。各自が 1 時間目に作成した透明シートや地図をもちより、それらを重ね合わせて読み取れることや考えられることについて	・ 事実と意見を区別することを特に意識させる。	・ 地図から情報を読み取り、そこから導ける仮説について話し合い、意見をまとめている。 【資料活用の技能・表現】 【思考・判断】

	て話し合う。 ・意見をまとめ発表の準備をする。	・発表の仕方について 型や例を示す。	〔観察、発表〕
3	・重ね合わせた地図をスクリーンに 投影しながら、班でまとめた意見 や仮説とその根拠について発表す る。 ・他の班の発表を聞いて評価する。		・班の意見（仮説）とその 根拠を、聞き手にわかり やすく伝えている。 【資料活用の技能・表現】 〔発表、スライド〕

(3) 授業の概要

① 1 時間目の授業（透明シート等の作成作業）

時間	学 習 活 動	備 考
導入 5 分	・ 関東大震災の震度分布図を見て、揺れの大きかった地域と小さかった地域があることを確認する。	
展開 40 分	A 班 「五行川の旧河道と旧湿地帯の分布図」の作成 ・ 透明シートを「昭和15年の地形図」に重ねる。五行川の旧河道を青マジックでなぞる。また、旧湿地帯を青マジックで着色する。	・ 「昭和15年の地形図」は国土地理院から入手する。教師があらかじめ湿地帯のところを着色しておく。
	B 班 「地質調査図」の作成 ・ 国土地理院のボーリング柱状図に掲載されている10カ所の調査地点について、地盤の固い地点（N値※の大きい地点）は緑色、地盤の軟らかい地点（N値の小さい地点）は黄色で、また「粗砂」「細砂」など粒の揃った浅い砂礫層を含んだ地点を、危険度が高いと見なして青色で印をつける。 ・ 透明シートを真岡市の地形図の上に重ねる。地盤の固い地点は緑色の円を、地盤の軟らかい地点（N値が小さく、かつ砂礫層を含む地点）は黄色の円を、透明シートに書き入れる。	・ 「ボーリング柱状図・真岡」は国土地理院から入手する。（国土地理院のHPでも閲覧可能） ※N値とは地盤の固さを表す指標で、一定の力でパイプを30cm地中に貫入させるための打撃回数である。 ・ 基本となる地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図である。
	C 班 「緊急避難指定所と崖線（がいせん）分布図」の作成 ・ 透明シートを「土地条件図」の上に重ねる。緊急避難指定所に指定されている施設を見つけて赤で着色する。また、崖線を紫色で着色する。	・ 「土地条件図」は国土地理院から入手し、カラーでコピーしておく。緊急避難指定所や崖線がわかる。
	D 班 「縄文時代の集落跡分布図」の作成 ・ 透明シートを「真岡遺跡マップ」の上に重ねる。縄文時代の遺跡を赤の蛍光ペンで着色する。	・ 「真岡遺跡マップ」は市教育委員会から入手する。縮小コピーして縮尺を合わせておく。
	E 班 「もと水田に作られた市街地の分布図」の作成 ・ 半透明の真岡市の地形図を「昭和15年の地形図」の上に重ねる。かつて水田だったところに作られた市街地（住宅地）を緑の蛍光ペンで着色する。	・ 半透明の真岡市の地形図は、2万5千分の1地形図をトレーシングペーパーにコピーしたもの。 ・ 「昭和15年の地形図」には、教師があらかじめ水田だっ

	！	たところを着色しておく。
まとめ 5分	・ 次回の学習内容についての予告を聞く。	

授業の最初に、関東大震災の震度分布図をスクリーンに提示し、必ずしも震源からの距離が近いほど揺れが大きいとはいえないことを示した。災害には、その地域の様々な要素が影響することを確認し、これからの3時間の授業において、自分たちの学校がある地域の環境を様々な角度から分析して、自然災害の危険性や、その原因・背景などについて考え、意見をまとめて発表する、という授業の流れとねらいを確認した。

1時間目は、班ごとに、主に透明シートに作図をさせた。ひとつの班の中で同じシートを1人1枚作るように指示した。各班には、その班の作業手順を示した用紙を配付し、作業がスムーズに行えるようにした。作業手順がのみこめない生徒については、机間指導により個別に助言した。反対に、作業が早く終わった班の生徒には、作成した透明シートや地図からどのようなことが読み取れるか、考えておくよう指示した。

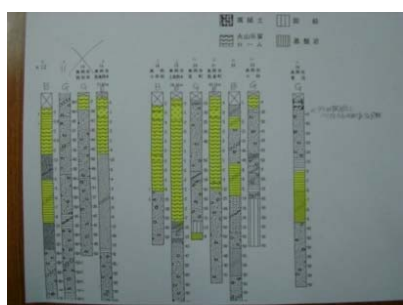
なお、すべての透明シートは、まず真岡市の地形図と重ね合わせて学校の場所（敷地）を赤で塗るようにし、後で地図を重ね合わせる時の目印になるようにした。

作成した透明シート及び地図は以下のとおりである。

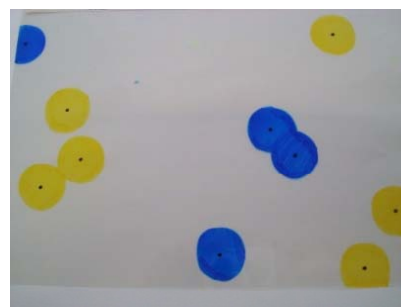
A班 五行川の旧河道と旧湿地帯の分布図



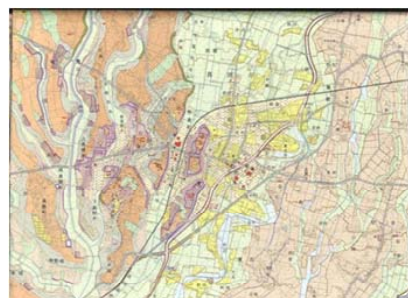
B班 ボーリング柱状図を着色



地質調査図



C班 土地条件図



緊急避難指定所と崖線分布図



D班 縄文時代の集落跡分布図



E班 もと水田に作られた市街地の分布図



基本となる真岡市の地図（E班が着色したもの）は、トレーシングペーパーに2万5千分の1の地形図をコピーしたものである。また、透明シートは、OHPフィルムを使用した。いずれも透過性があるので、着色してから重ねると、複数の地理情報を合わせて読み取ることが可能である。

【作業の様子】



（A班「旧河道と旧湿地帯」）



（B班「地質調査図」）



（D班「縄文時代の集落跡」）



（個別に助言している様子）



（作業の進み具合を確認する）

② 2 時間目の授業（追究活動）

時間	学 習 活 動	備 考
導入 5分	・ 本時の目標や学習内容、学習の進め方についての説明を聞く。	
展開 40分	・ メンバーが1時間目に作成した透明シートと地図を持ち寄り、それらを様々に重ね合わせて、地元地域における自然災害（地震や水害など）の特徴や危険性について、気付いたことや読み取ったことを話し合う。そして、既存の知識も活用して、班としての意見（仮説）をまとめる。 ・ 読み取った事実と意見（仮説）を、「研究レポート」にまと	・ 自分が作ったシートや地図の意味を自班のメンバーによく説明させる。 ・ 事実と意見（仮説）を明確に区別するように

【話し合いの様子】



(様々に重ね合わせてみる)



(水害の性質について討論中)



(遺跡の分布理由を追究)



(5人集まれば文殊の知恵)



(地図を読む)



(論理的に記述)

最後に、発表（プレゼンテーション）についての説明を行った。まず、今回の発表（プレゼンテーション）は、聞き手である生徒一人一人が発表を審査するコンテスト形式で行い、上位入賞班は表彰するとともに、優勝と準優勝した班の発表者には賞品も出ることを説明した。審査の仕方については、**資料2**のような「ジャッジメント・ポート」を配布し、審査する項目について確認した。次に、班ごとに発表者（プレゼンター）と機器操作係を決めておくよう指示した。特に発表者（プレゼンター）については、プレゼンテーション力をつけるチャンスでもあるので、押しつけあうのではなく、積極的に立候補するよう促した。また、発表（プレゼンテーション）のやり方について、**資料3**のようなプリントを配布して、発表の型を示すとともに、教師が簡単な模擬プレゼンテーションをやって見せた。生徒はこのような学習活動に不慣れであるため、マニュアルや見本が必要であると考えた。

資料2

ジャッジメント・ポート※		
プレゼンター（ ）班（ ）さん		
1 プレゼンテーションについて		
	ジャッジ・ポイント	はい ←→ いいえ
姿 勢	ときどき顔を上げて、前を向きながら発表できていましたか。	4 3 2 1
	物怖じせず、堂々と発表できていましたか。	4 3 2 1
	聞き手をまんべんなく見ながら発表できていましたか。	4 3 2 1
内 容	意見(仮説)の根拠を明らかにしていましたか。(～だから～となる)	4 3 2 1
	深い読みや鋭い読みをしている、と感心した点がありましたか。	4 3 2 1
	主張(言いたいこと)が明確な発表でしたか。	4 3 2 1
話し方	大きな声、はっきりした話し方でしたか。	4 3 2 1
	適切な速さ(早過ぎず、遅過ぎず)でしたか。	4 3 2 1

	結論を先に、根拠を後にという順序が守られていましたか。	4	3	2	1
全 体	始めと終わりのあいさつはきちんとしていましたか。	4	3	2	1
	制限時間が守られて（早過ぎず、オーバーせず）いましたか。	4	3	2	1
	伝えたいという意欲が感じ取れる発表でしたか。	4	3	2	1
		合計 点			

2 プレゼンテーションまたはプレゼンターのよかったところを書き出してみよう。

3 聞き手の自分について

	自己評価ポイント	はい ←→ いいえ
内容理解	メモを取りながら集中して聞くことができましたか。	4 3 2 1
	発表の内容はよく理解できましたか。	4 3 2 1
プレゼンへの協力	質問ができましたか。（返答に困る質問はしないのがマナー）	4 3 2 1
	良い点、分かりにくい点をうなずきや表情で返せましたか。	4 3 2 1

審査員（ ）年（ ）組（ ）番 氏名（ ）

※ボートは投票用紙の意味

資料 3

プレゼンテーションの仕方	
1	メンバー 5 人が左から番号順に教壇上に整列する。プレゼンターは教卓のところに立つ。
2	「これから、第〇班の発表をはじめます。 研究メンバーは、〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇の 5 名です。 よろしくお願いします。」
3	5 人全員が揃って一礼する。 *首は曲げずに腰から。全員揃っていると印象が良い。
4	「私たちは、（ ）について研究した成果をプレゼンしたいと思います。」
5	「スクリーンをご覧ください。（ ）という事実が分かりました。」 「また、（ ）という事実も分かりました。」
6	「このことから、私たちは、（ ）という仮説を主張したいと思います。」 「その根拠は、（ ）です。」 「なぜならば、（ ）からです。」
7	「以上で第〇班の（ ）についての発表を終わりにします。 ご清聴ありがとうございました。何か質問がありましたらよろしくお願いします。」
8	質問を受ける。
9	「ありがとうございました。」全員が揃って一礼する。

③ 3 時間目の授業（プレゼンコンテスト）

時間	学 習 活 動	備 考
導入 5 分	・プレゼンテーションの目的や意義について理解する。 ・プレゼンテーションにあたっての注意事項を理解する。 ・プレゼンテーションの聞き方と審査方法について理解する。	
展開 40 分	・プレゼンテーションの最終打ち合わせを行う。 - 特に、説明に合わせて適切なタイミングで地図を提示できるように発表者と操作係の打ち合わせを綿密に行う。 ・プレゼンテーションを行う。 ・聞き手は、発表をよく聞いて積極的に質問する。また、プレゼンテーションの内容や発表の仕方等について審査する。	・聞く態度の重要性について自覚させる。
まとめ 5 分	・教師の講評とまとめを聞く。 ・次回の学習内容についての予告（審査結果の発表）を聞く。	

まず、プレゼンテーションの目的や意義について説明した。地元企業が採用の際に重視する資質として、コミュニケーション力やプレゼンテーション力、実行力などを含めた「行動力」が挙げられているという事実を伝え、自分の意見やアイデア、気づいたことなどを、他者に伝えたり提案したりする力は、社会に出たときに必要とされる力であることを理解させた。

また、「ジャッジメント・ボード」を示しながら、発表の仕方や内容だけでなく、プレゼンターも含めた発表する班のメンバーの態度、聞き手の態度なども大切であることを確認した。そして、審査の仕方や用紙の回収方法など、具体的な指示をした後、班ごとに最後の打ち合わせをさせた。

以下に、2つの班のプレゼンテーションの様子を示す。

【発表】

それでは、第1班のプレゼンを始めます。メンバーは、皆さんに向かって左手から〇〇、〇〇、〇〇、〇〇、そして私、〇〇の5名です。よろしくお願いします。

（5人揃って一礼。聞き手は拍手）



今回私たちは、縄文時代の集落についてプレゼンしたいと思います。それではスクリーンをご覧ください。

縄文人は、多くが真岡台地に住み、真岡平野にはあまり住んでいなかったことが分かります。そして、現代人は、縄文人があまり住んでいなかった真岡平野に多く住んでいることが分かります。以上のことから、私たちは、なぜ縄文人は現代人があまり住まない真岡台地に好んで住んでいたのかということに興味を持って、考えてみました。

その理由は、真岡台地は水害に強いために、そこを選んで住んでいたからである、という仮説

を、私たちは主張します。

五行川はたびたび水害を起こし、河道を変えてきました。そのような五行川が流れる真岡平野は、縄文人には恐ろしくて住むことができなかったのではないかと考えました。一方、真岡台地は、火山灰の関東ローム層が積もっていて、地盤はゆるいのです。かつて湿地帯だったところもあります。しかし、縄文人は農業をしなかったので、農業には向いているけれども水害の危険性の大きい真岡平野に住む必要がなかったはずです。

以上で、第1班のプレゼンを終わりにします。ご清聴ありがとうございました。

(5人揃って一礼。クラスの生徒たち拍手)

ありがとうございました。何か質問がありましたらよろしくお願いします。

【質疑応答】

(教師)「何か質問ということですので、質問のある人は挙手をしてください。」

(生徒)「最近では農耕が縄文時代から始まっていたといわれていますが、どうですか？」

(発表者)「ええと、縄文時代から一部では農業が始まっていたかもしれませんが、私たちは、縄文人はほとんどは狩猟や採集の生活をしていると考えました。」

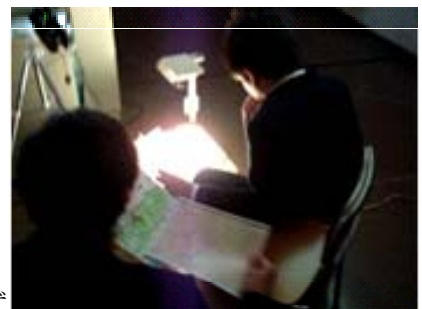
(生徒)「わかりました。」

【発表】

これから第4班のプレゼンをはじめます。メンバーは、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇の5人です。よろしくお願いします。

今回のプレゼンは、地図から読み取った事実と考えられる仮説についてプレゼンしたいと思います。スクリーンをご覧ください。

わたしたちは三つの事実を発見することができました。一つめは、縄文時代の人は川から離れて住み、現在の人は川のそばに住んでいるという事実です。二つめは、避難所は、必ずしも安全な場所ではなく、崖のそばなど危険なところにも多くあるという事実です。三つめは、昭和15年の五行川は蛇行して流れ、現在の五行川は直線的に流れているという事実です。



(映す地図を取り替える生徒)

一つめの仮説に入ります。縄文時代と現代とで住む場所が違うのは生活の違いによる、という仮説を私たちは主張します。なぜなら、縄文時代の人びとはまだ稲作を知らず、動物を捕まえる狩りをしていたため、水害に遭わず、狩りに最適な多くの崖があり、身を隠すにも効果的な崖の多くあった場所を選んだと考えられるからです。縄文時代の人びとと違い、稲作を多く行っている現在の人びとは、水を多く利用でき、家などの建築物を保つのに安全な地盤の強いところに住む場所を移しました。そこは地震などには強いけれども、川の氾濫など水害の危険が大きいという問題点も考えられます。

二つめに、避難所が危険な場所にも建てられているのは、あえて建てたという仮説をわたしたちは主張します。なぜなら、自然災害に強く安全なところでは、避難所があっても利用されることが少なく、自然災害に弱く危険なところの方が、住民が避難所を利用する可能性が高いと考えられるからです。ただ、関東大震災のように、避難所に被害が加わると大惨事につながるため、少し遠くとも、東沼や西郷にも、避難所を設置すると良いでしょう。

三つめに、五行川の川の流れが直線化したのは、自然に変化したのではなく、人工的に直線化したという仮説を私たちは主張します。なぜなら、川が曲がっていると、曲がっているところで

川がぶつかり、水があふれてしまうからです。最初に話したように、現在の人びとは稲作にも利用できるため、川のそばに多く住んでいます。そのため、水害を防ぐことは大切なことです。ただ、直線化すると、水害が減ることによって、塩害が増えたり、肥沃な土が減ったりするという影響が出ることも考えられます

以上で、地図から読み取った事実と仮説についての私たちのプレゼンを終わりにします。ご清聴ありがとうございました。(5人揃って一礼。クラスの生徒たち拍手)

生徒の発表は、初めての経験であり決して流暢なものではなかったが、自分たちの発見した事実やそこから導き出した仮説について伝えたい、という熱意が感じられるものであった。聞き手の生徒たちも、うなずいたり身を乗り出したりして一生懸命に耳を傾けた。

班によって、どの透明シートと地図を重ね合わせるかは様々であり、そこから読み取れることも多岐にわたっていた。いろいろな地図を様々に組み合わせて複数の地理情報の相関関係を発見していく活動は、生徒の探究心を刺激したのか、鋭い読みから珍説まで多様な仮説が飛び出した。

次の例は、的確で鋭い仮説の例である。

真岡台地は地盤が緩く真岡平野の地盤が固いのは、関東ローム層が原因であると主張します。その根拠は、真岡台地には関東ローム層が積もっているが、真岡平野にはないという事実です。

地質調査図をローム層分布図と重ね合わせると、このような傾向を読み取ることができる。

また、ユニークな仮説として、次のような例がある。

「真岡台地の地盤がゆるいのは、昔そこに貝塚があって、そこに捨てたゴミがたまった結果である」という仮説を私たちの班は主張します。

地質調査図と縄文時代の遺跡の分布図に相関関係が見いだせるため、生徒達はそこに因果関係をも発見しようと試みて話し合った結果このような仮説を思いついたものと考えられる。

【地図の重ね合わせの例】



旧湿地帯と地質調査図を重ねて
「市の西部は地震に弱い」と主張。



土地条件図と緊急避難施設及び崖線図を重ねた。
「西部の避難所は危険性が高くなる可能性もある」と説明。



(身を乗り出して聞く)



(教師の講評を聞く)

探究活動を行う際に、事実と意見（仮説）を区別するよう指示したが、生徒は予想以上に苦戦していたようだった。班で話し合いをした時には「これは事実か。」「いや仮説ではないか。」などと議論をする様子が見られたが、発表を聞くと、それらが十分に区別できていない次のような例が相次いだ。

地盤が良いところに住んでいる人が多いが、昔湿地帯だったということを知らずに住宅を建てている場合もあるという事実が分かりました。

「昔湿地帯だったことを知らずに住宅を建てている」ことは推論であるにもかかわらず事実として述べている例があった。

また、事実と意見（仮説）の区別があいまいな例として、次のような例がある。

平野部は川が運んできた砂利で地盤が固く、当時の住居である竪穴住居が掘りにくかったということが考えられます。

事実と意見（仮説）を明確に区別して表現することは決して容易ではないことに、改めて気付かされた。

なお、地図の読み取りや考え方に誤りのある発表については、適宜、教師が指摘し訂正した。また、生徒の記入した「研究レポート」を提出させ、コメントを加えたり必要な場合は訂正したりするなどの事後指導を行った。

授業終了後に、生徒から回収した「ジャッジメント・ボード」を集計し、次の時間に上位3つの班とそのプレゼンターの表彰を行った。

(4) 生徒による授業評価について

透明シートの作成などの作業に取り組んだ感想をたずねたところ、次のような結果になった。

- ・丁寧かつ精密に作業するのは面白かった。 58.9%
- ・作図作業は単調で根気がいり苦手だった。 41.1%

作図作業に対しては好き嫌いがはっきり分かれた。苦手と感じる生徒が多かったことは予想外の結果であった。ほとんどの生徒が一生懸命に取り組んでいたもので、できればに納得のいかなかった生徒が多かったとも考えられる。

自分たちで地図を重ね合わせて追究していく学習活動については、次のような回答状況であった。

- ・自分たちで発見していく授業は面白くて意欲が増す。 82.1%
- ・講義中心の授業で早く答えを教えてもらいたい。 17.9%

自ら探究し発見のある授業を肯定的にとらえた生徒が多かった。また、8割以上の生徒が、今後も講義中心の授業だけでなく多様な学習形態を取り入れた授業をして欲しい、という要望をもっていた。

さらに、事実と意見（仮説）を区別して述べることにについてたずねたところ、次のような結果であった。

- ・意識して行えば十分できると思った。 23.1%
- ・容易ではないが、意識していこうと思った。 41.1%
- ・なかなか意識できず難しかった。 33.3%

生徒たちの多くが難しさを感じていたことがわかった。しかし、自分の考えをわかりやすく筋道立てて説明するというプレゼンテーション力の重要性についてはよく理解できたようで、またやってみたいという感想もあった。

3 まとめ

(1) 成果

本事例では、地図の活用と言語活動の充実という新学習指導要領の改善事項を踏まえて、「身近な地域の自然環境と防災」というテーマで探究活動及びプレゼンテーションを授業で実践した。

地図については、新学習指導要領で新たに加えられた地理情報システム（GIS）の活用を図りたいと考えた。地理情報システムは有用性が高く、近年は、GISソフトがフリーウェアも含めて数多く発表され、実践事例も増えてきている。しかし、情報機器やソフトなどの学習環境を整えるまでには時間がかかるのが現状である。また、実際に使ってみると、生徒が操作に慣れることに時間がかかり、パソコンの授業のようになりがちだという問題もある。そこで、本事例では、トレーシングペーパーやOHPフィルムを使って複数の地図や地理情報の重ね合わせを行った。アナログな手法ではあるが、道具さえ準備しておけば簡単にでき、地理的な見方や考え方を養うのにとっても有効な手段である。生徒は、様々な組み合わせを試しながら、複数の地理的事象の相関関係を探り、その理由を考えることができた。

言語活動の充実という点では、班ごとに地図から読み取れることと、そこから考えられることについて話し合い、プレゼンテーションを行ったことにより、コミュニケーション力や、他者にわかりやすく説明する力の必要性に気付かせ、それらの力を身に付けさせるきっかけとなった。言語活動を意識した学習活動を、今後も継続して行いたい。

また、今回の実践で、生徒たちが探究活動に積極的かつ能動的に取り組む姿をみることができた。教師の話をまじめに聞く静かなクラスであるという印象をもっていたが、班ごとの話し合いでは、いつもおとなしい生徒が活発にディスカッションを行い、地図を囲んで議論に没頭していた。多くの生徒が、自分たちで探究し発見する授業は面白いし意欲が増す、という感想を述べていた。他の班の発表を聞く態度も前向きで、一言も聞き漏らさずに聞こうという気持ちが表れていた。本事例を通して、普段の授業では気付かなかった生徒の多様な能力や可能性を発見することができ、生徒の学ぶ意欲を高め主体的に学ぶ態度を育む方法についての手がかりを得ることができた。

(2) 課題

事実と意見（仮説）をきちんと区別して論理的に説明することは、生徒にとっては、教師が予想した以上に難しいようであった。生徒の発表では、推論や意見を事実と誤認していたり、両者の区別があいまいな説明をしたりする班が多かった。生徒自身も、実際にやってみて難しさを実感したようである。論理的に説明する力は、入試等で小論文を書く場合はもちろん、進学や就職をした後においても必要とされる大切な力である。今後も、授業の中で、事実とそうでないものを判断したり、明確に区別して記述、説明したりするなど、繰り返し意識付けし、練習していく必要がある。また、特定の教科だけでなく、さまざまな教科・科目等で言語活動を充実させ、生徒の表現する力を育成することが大切であると感じた。

今回実践した班ごとの話し合いや発表といった学習活動など、多様な学習形態を取り入れていくことで、生徒の多様な力を伸ばしていくことが期待できるのではないだろうか。今回のプレゼンテーションコンテストで入賞した生徒は、必ずしも筆記試験で上位の生徒ではなかった。プレゼンテーション力は、採用にあたって企業が重視する力であり、社会に出てからも必要とされる。しかし、これを日常的に行っている講義中心の授業で培うことは難しい。知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力等の多様な力を育成するためには、多様な学習形態や学習方法を授業の中に取り入れていくことが必要である。

実際に探究活動を実施してみて、班ごとの作図に必要な地図や資料を準備するなど、事前の準備に多くの手間と時間を要した。素材を集めて加工しておいたり、人数分のペンを用意したりと、こ

まごまとした準備が必要で、教師の負担は決して小さくなかった。しかし、最初は苦勞しても、繰り返して行うことで、教師も慣れて自分なりのノウハウを得ることができる。生徒たちに準備段階から関わらせることもできる。多少の手間をかけても、様々な地図や地理情報を材料として、生徒に考えさせたり討論させたり、また発表させたりする学習活動は実践する価値のあるものであり、これからも継続していきたい。

事例2 地図の読図から言語活動への展開（地理B）

1 ねらい

新学習指導要領において全ての教科にわたる改善事項として示された「言語活動の充実」は、「地理」ではA、Bともに、「3 内容の取扱い」の中で「地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論するなどの活動を充実させること。」と記述されている。

「地理B」の授業は、教師の説明を聞いてノートを取り、知識を身に付けることに重点がおかれ、ある事象の要因や背景を自ら考えたり説明したりする学習は、十分に行われていないのが現状である。そのため、思考力が必要とされる問題や、論述問題などを苦手とする生徒が多い。

そこで、本事例では、地図から読み取れることを分かりやすく説明したり、考察したことを根拠を明らかにして説明したりするといった学習活動を行った。さらに発展的な学習として、過去の大学入試センター試験の問題を解くとともに、自分がその解答を選んだ理由を論述させた。これらの学習により、地図の読み取りを通して地理的な見方・考え方を身に付けさせるとともに、表現する力を育成したいと考えた。

なお、実践は第2学年を対象に行った。

2 授業実践

実践1 中国とアメリカの農業地域区分

(1) 指導のねらい

- ・中国とアメリカについて、気候と農牧業の関連を地図から読み取ることができる。
- ・地図から読み取れることを文章として表現することができる。

(2) 授業の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
導入 5分	・農業の地域区分について確認する。		
展開 1 20分	・ワークシート1の①、②の白地図が、それぞれ何を示した主題図であるか、地図帳を参考にして考える。 ・①の白地図に中国の降水量の数値を、②の白地図に農業区分を、それぞれ書き入れる。 ・①、②の主題図から読み取れることをそれぞれ記述する。 ・①と②の主題図を関連づけて分かることは何かを考え記述する。 ・稲作に適した自然条件について記述する。	・地図帳の構成について確認して、該当する主題を自分で探すよう指示する。 ・生徒の記述状況を確認し、適宜発表させる。 ・ホワイ川とチンリン山脈の位置を①、②の白地図に書き入れさせ、関連性を見いださせる。	・2つの地図から中国の穀物栽培と降水量との関連を読み取り、適切に表現している。 【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート、発表〕

展開 2 20分	・ワークシート2の白地図に、アメリカの農牧業の区分を記入する。 ・地図を参考に、指定された語句を使ってアメリカの農牧業地域について記述する。 ・地図の酪農地域を赤で塗る。 ・酪農が発達する自然条件を確認し、アメリカにおける酪農地域の気候と土壌について考え、記述する。	・生徒の記述状況を確認し、適宜発表させる。	・アメリカの農牧業と気候との関連について地図から読み取るとともに考察し、適切に表現している。 【資料活用の技能・表現】 【思考・判断】 〔ワークシート、発表〕
まとめ 5分	・自分の言葉で説明することの意味を理解する。		

展開1では、まずワークシート1の2つの地図が何を示す主題図であるか、地図帳で該当する地図を探させ、記入させた。最初は①に「気候」を、②に「農業」を記入した生徒が多かったため、「半分だけ正解である」ことを告げて考えさせた。その結果、次のような正答が得られた。

①は中国の「降水量」にしました。なぜなら地図帳では年降水量と1月の平均気温線が記されていますが、ワークシートの方には1月の平均気温線が記されていないので、「降水量」とした方が的確な感じがします。また、②は中国の「稲作地帯と小麦地帯」にしました。これも、地図帳ではとうもろこし地帯やオアシス農業などが記されていますが、ワークシートの方では稲作の地域と小麦の地域しか記されていないからです。

そこで、本時の前半では中国の年降水量と稲作・畑作の区分について学習することを確認した。

次に、①、②の地図に、統計上の数値や区分を記入させ、それぞれの地図から読み取れることをワークシート1に記入させた。生徒からは次のような解答が得られた。

①は「中国の降水量は北の地域よりも南の地域の方が降水量が多い」です。また「内陸部に近づくにしたがって降水量が少なくなる」です。②の方では「南部では稲作、北部では小麦の生産が多い」です。

そこで、①、②の地図をあわせて分かることを考えさせた。その際、使用する語句として「ホワイ川、チンリン山脈」を示し、両方の地図にこの川と山脈の位置を書き込ませ、それを含めて関連性を把握させるようにした。①の地図からは、ホワイ川とチンリン山脈を結ぶ線が年降水量1000mmの線とほぼ一致し、②の地図からは、ホワイ川とチンリン山脈を結ぶ線を境に稲作地帯と小麦地帯とに分かれていることが分かる。これらをまとめて記述するように指示したところ、生徒は次のような説明をすることができた。

中国では、ホワイ川とチンリン山脈を結ぶ線が年降水量1000mmとほぼ一致し、それを境に稲作地帯と小麦地帯に分かれています。

地図などから分かることを文章で説明するという活動を授業で行うのは初めてであるため、段階を踏んで丁寧に書かせた。

〔生徒が記入したワークシート 1 の例〕

ワークシート1

①タイトル(中国の降水量)

2年7組 番

②タイトル(中国の農業)

1 上の地図は、中国のあるデータを地図化したものであるそのタイトルを入れてみよう。

2 地図帳を見ながら、上の地図に統計などを記入しよう。

3 上の地図からわかることをなんでもいいの下に記入しよう。

① 海に近いところは降水量が多く、内陸に行くにしたがって降水量が少なくなっている。

② 南部では稲作、北部では小麦の生産が多い。

4 上の地図①と②をあわせて、わかることを下に記入しよう。

指定語句
ホワイ川 チンリン山脈

ホワイ川とチンリン山脈を境として、東は降水量1000mmの稲作一帯、西は降水量が少なく稲作と小麦に別れている。

5 2枚の地図を参考に稲作の自然条件をまとめよう。

稲作は降水量が1000mm以上で1月の平均気温が5℃以上の地域で稲作の二期作

展開2では、アメリカの農牧業地域について、展開1と同様に、まず白地図に必要な情報を書き込ませ、そこから分かることを、指定された語句を使って記述させた。

ワークシート2

2年7組 番

1 上の地図を資料集 p 66 を参考に具体的に語句を記入しよう。

2 上の地図を参考に以下の語句を使用し、アメリカの農牧業地域を説明しよう。
語句
西経 降水量 西部 東部 五大湖 南 春 冬 カリフォルニア

アメリカ合衆国の農業地域は、(西経100°の線と年降水量500mmの線がほぼ一致しており、その西部では根付作物が盛んであり、その東部では農業地域となっている。五大湖周辺では酪農と肉用牛の飼育とが盛んであり、その南部では小麦と大豆の栽培が盛んである。また、年降水量500mm以下の南部では畜産と、その東部では小麦と大豆の栽培が盛んである。また、カリフォルニアでは柑橘類の栽培が盛んである。)

3 上の地図で酪農地域を赤色で示そう。

4 教科書の p 69 から酪農の特色について以下の文を完成させよう。
酪農は (寒冷) な気候と (やせた) 土壌のため穀物栽培にあまり適さない地域で発達した。

5 4 の文章を証明するために地図帳 p 69 ①の地図の資料を使い説明しよう。

この地域は、ケッペンの気候区分では (亜寒帯湿潤気候) 気候に属している。また、この地域はかつて (氷河) におおわれ、(肥沃な) 土壌である。

〔生徒が記入したワークシート 2 の例〕

指定語句にある「西経」について、生徒から「地図帳には西経80度から120度までであるが、どこを使えばよいか。」という質問があった。ここでの「西経」は、展開1の「ホワイ川とチンリン山脈」と同じような役割をするもので、ある経度を境にして農業地域が大きく区分される。そのような視点で考えてみるよう促し、質問者に対し「よい質問である。」と賞賛した。

生徒の解答で、よく書けたものとしては次のようなものがある。

アメリカ合衆国の農業地域は西経100°の線と年降水量500mmの線がほぼ一致しており、それより西部では放牧などが行われており、それより東部が農業地域となっている。五大湖周辺では酪農が行われ、南に行くにつれて、とうもろこし地帯、多角的農業地帯、綿花地帯となる。年降水量500mm付近の北部では春小麦、南の方では冬小麦が栽培されている。また、カリフォルニアでは地中海式農業が見られる。

展開1よりも説明すべき内容が多く、文章も長くなるため、生徒は難しさを感じていたようだ。時間内に書き終わらず、後で教師が提示した模範解答を参考にして書いていた生徒も見られた。しかし、指定語句を使用する順に提示しておいたため、それを手がかりとして、生徒は熱心に取り組んでいた。

次に、酪農地帯をとりあげ、教科書で「酪農は、冷涼な気候とやせた土壌のため穀物栽培にあまり適さない地域で発達した。」ということを確認した。その後、アメリカの酪農地帯がこの条件に合致することを説明するため、その地域の気候を確認したり、土壌について考えさせたりして、ワークシートの空欄に記入させた。特に「土壌がやせている理由」は、やや難しい課題であったため、堆積平野と浸食平野について教師から発問し、最終氷期の氷河の最大範囲との関連に気付かせるよう、ある程度誘導して解答を導いた。次の波線の部分が生徒の記述部である。

この地域は、ケッペンの気候区分では亜寒帯湿潤(Df)気候に属している。また、この地域は、かつて氷河に覆われ浸食を受けたため、やせた土壌である。

地理の授業では、地図帳や資料集を見る機会が多い。しかし、ただ見ただけでは忘れがちなことも、自分で文章に書いてみることで整理ができ、複数の地理的事象を関連づけて理解できるとともに、その知識を確実なものにすることができる。このように、書くことの意味を生徒に伝え、この授業を終了した。

実践2 工業製品の生産と立地

(1) 指導のねらい

- ・企業の生産活動における生産費（コスト）の重要性や、その種類について理解する。
- ・生産費（コスト）の面から工業の立地について考え、根拠を明らかにして表現できる。

(2) 授業の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
導入 3分	・企業の活動が利潤を目的とすること、そのために生産費を下げることが重要であることを理解する。		
展開 45分	・主な生産費として原材料費、人件費、輸送費があることを理解する。 ・鉄鋼、電気製品の組立て、ビールや清涼飲料、プラスチック（石油化学）の4種類の工業のうち、一つを選び、自分だったらどこに工	・最初は教科書等を見ないで書くように指示し、次に教科書や資料集を参考にして	・企業の生産活動における生産費の重要性や、その種類について理解している。 【知識・理解】 〔発問、観察〕

	場を建てるかを考え、ワークシートに記入する。 ・教科書と資料集を見て、立地による工業の分類を踏まえた上で、自分が選んだ工業について、どこに工場を建てるか、ワークシートに再度記入し発表する。	書かせる。 ・4種類の工業について、生徒に発表させる。	・それぞれの工業に適した立地について考え、根拠を明らかにして表現している。 【思考・判断】 【資料活用の技能・表現】 [ワークシート、発表]
まとめ 5分	・工業製品の生産と立地について確認する。		

最初に、企業が利潤を追求する上で生産費（コスト）を下げるのが重要であり、生産費には原材料費や人件費、輸送費などがあることを確認した。その後、鉄鋼、電気製品の組立て、ビールや清涼飲料、プラスチック（石油化学）の4種類の工業から一つ選んで、自分が経営者だったらどこに工場を建設するかを考えさせた。その際、日本でも海外でもよいが、日本の場合は都道府県まで指定することと、ワークシートに従って、その場所を選んだ理由を明らかにすることを指示した。まず一度自分なりの考えで書いてから、教科書や資料集を読み、原料指向型工業、市場指向型工業などの分類について理解した上で、もう一度同じ工業について記述し発表させた。工場の立地について、論理的な裏付けを踏まえて記述することで、より説得力のある説明ができることに気付かせたいと考えた。

以下に、生徒の記述及び発表した内容を挙げる。それぞれ上が一度目に書いた意見、下が再度記述して発表した意見とそれに対する教師の対応である。

〔鉄鋼業について〕

私は工場を中国に建設します。なぜなら人口が多いので、人件費を削減できるのではないかと考えたからです。

生徒 鉄鋼業の工場は前と同じく中国に建設したいと思います。鉄鋼業は、原材料と製品を比べると原材料の方が重いので、重い原材料を運ぶと輸送費が高くなってしまうため、原料の産地に立地する傾向があるとわかりました。中国では鉄鉱石やそれを加工するエネルギーとしての石炭が産出されますし、また安価で豊富な労働力があるからです。

教師 わかりました。鉄鋼業というのは原料の産地に立地するという傾向があるんですね。では、もし日本の国内で建設するとしたらどういったところが良いと思いますか。

生徒 はい。鉄鋼業の原料である鉄鉱石や石炭は国内ではあまり産出されないので、輸入に頼るしかありません。だから、輸入に便利な海沿いが良いと思います。

教師 わかりました。臨海部に立地するということですね。

〔ビール・清涼飲料について〕

私は工場を栃木県に建設します。なぜなら東京よりも土地が安いし、飲み物だから後は売り場に運ぶだけだから人が多い都会に近いところの方が輸送費も安くすんでいいからです。

生徒 ビール・清涼飲料水の工場は、大都市に近いところで、東京に建設します。このような製品は、原料と製品を比べると製品の方が原料より重くなるので、できあがった重い製品を長距離運ぶと輸送費がかさんでしまうので、人口が多い大都市に建設しようと思いました。

〔ビール・清涼飲料水など〕

私は工場を（栃木県）に建設します。なぜなら、東京にも工場が多いので、人件費が安いから。後は売り場に運ぶだけだから、人が少ない都会にも近い所の方が輸送費も安く済むから。

〔鉄工業〕

私は工場を（中国）に建設します。なぜなら、人口が多いので、労働力と設備とお金が安いから。そして、鉄の原料も豊富だから。

私は工場を（埼玉県）に建設します。なぜなら、栃木県よりも大都市に近いので、市場や物流の利便がよくなるし、水はいつでも得られる。また、原料だから、海の近くでなくて大丈夫だから。

私は工場を（北海道）に建設します。なぜなら、ここでは鉄の原料産地があるため、輸送費用を削減することができるから。

多くの生徒は、二度目の記述においては、一度目に比べて次のような進歩が見られた。

- ・教科書等の「立地による工業の分類」を参考に、原材料と製品の重量から輸送費を考えたり、原材料の調達方法、市場からの距離、交通の利便性、人件費など、きちんとした理由づけをして、説明している。
- ・説明する際の根拠を1つではなく複数あげて、多角的に説明している。

例えば、電気製品の組立て工業について、他の産業との関連から考えたり、労働力の質も考慮したりするなど、思考の幅を広げて記述した生徒もみられた。次がその例である。

私は工場を京都に建設します。なぜなら、京都付近にはIC（集積回路）工場が多く存在し、また高度な技術をもつ労働力も得られるからです。航空機を利用することもでき、日本海側は舞鶴湾などにも面しているので輸送にも便利です。

最後に、教科書等では輸送費の面からの説明が多いが、実際には地価など様々な要素が立地に影響していることや、同じ組立て工業でも製品によって重視される条件が変わってくることなどを指摘した。

実践3 大学入試センター試験を活用した言語活動

(1) 実践の概要

「エネルギー・鉱産資源」と「工業の発達と立地」の学習が終わった時点で、それぞれの学習内容に関連する大学入試センター試験の過去の問題を利用して、解答を選択した理由を文章で書かせる活動を実施した。

センター試験は4つあるいは6つの選択肢から正答を選ぶ形式であり、問題演習を行う際には、答え合わせを行った後、教師の解説を聞いたり問題集の解説を読んだりすることが多い。本実践では、問題を解くと同時に、なぜその解答を選んだのかを文章で説明させることとした。漠然と答えるのではなく、判断の根拠を記述させることで、論理的に説明する力が身に付くだけでなく、学んだ知識を確認したり整理したりすることができる考えた。

①「エネルギー・鉱産資源」に関する問題

ボーキサイトの産出量、アルミニウムの生産量、アルミニウムの消費量のいずれかについて、世界全体の量に占める割合の上位8カ国を示した3つの地図を見て、それぞれの地図が表しているものを選ぶ問題である。

それぞれの地図を選択する根拠としては、次のようなことが考えられる。

・ボーキサイト産出量の上位8か国を示した地図イを選択する根拠

世界1位の産出国はオーストラリアである。また、ブラジル、ギニアなどの熱帯地域で産出が多い。

・アルミニウム生産量の上位8か国を示した地図アを選択する根拠

ボーキサイトからアルミニウムを生産するには多量の電力が必要であるため、アルミニウムの生産は、水力発電が盛んな国や石炭などのエネルギー資源に恵まれた国で多く行われている。

・アルミニウム消費量の上位8か国を示した地図ウを選択する根拠

アルミニウムは現代の生活に欠かせない金属であり、先進国での消費が多い。ただし、消費には人口規模も関係するため、中国やインドでの消費も多くなっている。また、日本に着目すると、日本はボーキサイトが産出されず、電力も高価であるため、アルミニウムを生産しておらず、消費のみしている。

正答の③を選べた生徒は90%（40名中36名）であった。正解した生徒の記述としては、以下のようなものがある。

ボーキサイトの産出量をイにしたのは、オーストラリアやブラジルなどの熱帯の地域に多く分布しているから。アルミニウムの生産量をアにしたのは、先進国や生産の技術が進歩しているところなどに多く分布しているからです。アルミニウムの消費量をウにしたのは、日本ではボーキサイトは産出されず、アルミニウムの生産もしていないけれども、消費量が多いと思ったのと、アルミニウムの消費は先進国に多いからです。

ボーキサイトの産出量はオーストラリアが最も多いからイ。また、アルミニウムの消費量は先進国（工業国）で多いのでウ。だから残ったアはアルミニウムの生産国となる。

前者は、アルミニウム生産量について、生産に必要なエネルギーについての視点が欠けているが、他の2つの地図については適切な説明がなされている。後者は、ボーキサイトの産出量とアルミニウムの消費量の2点のみを説明し、もう1つは説明を省いているので、十分な記述ではなく、また文章表現としてもやや稚拙であるが、正解を選ぶことはできている。

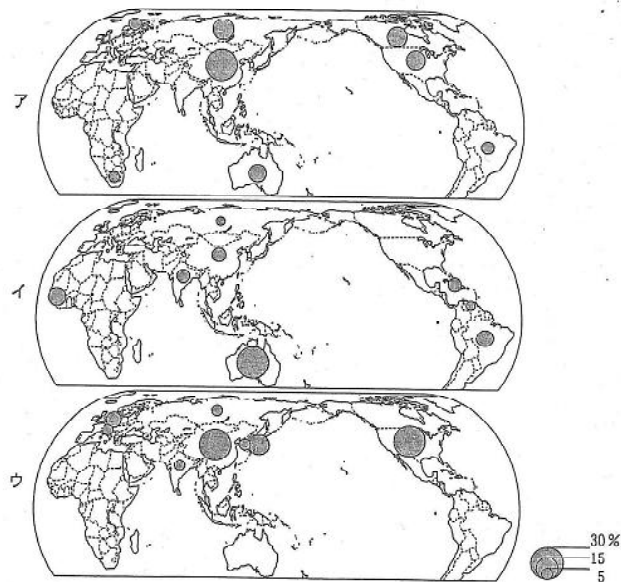
誤答としては、ボーキサイトの産出量のみ正しく選べた生徒と、アルミニウムの消費量のみ選べた生徒がそれぞれ2名であった。次の例は、ボーキサイトの産出量のみ正しく選べた生徒の記述である。

まず、ボーキサイトの産出量においては、熱帯の地域が多いので、赤道近くの国が上位にあるイ。アルミニウムの生産は電力が必要なので、先進国が上位に多いウとなる。

アルミニウムの生産に電力が必要であるという正しい知識をもっていたが、そこから先進国と

問1 次の図1中のア～ウは、ボーキサイトの産出量、アルミニウムの生産量、アルミニウムの消費量のいずれかについて、その世界全体の量に占める割合の上位8か国を示したものである。図1中のア～ウとボーキサイトの産出量、アルミニウムの生産量、アルミニウムの消費量との正しい組合せを、次ページの①～⑥のうちから一つ選べ。

7



統計年次は2004年。
『世界国勢図会』により作成。

図1

	①	②	③	④	⑤	⑥
ボーキサイトの産出量	ア	ア	イ	イ	ウ	ウ
アルミニウムの生産量	イ	ウ	ア	ウ	ア	イ
アルミニウムの消費量	ウ	イ	ウ	ア	イ	ア

（2008年度大学入試センター試験「地理B」より）

考えて、日本も上位に入っている地図を選択している。また、次の例は、アルミニウムの消費量のみ正しく選べた生徒の記述である。

消去法で、ウは、オーストラリアが上位に入っていないので、ボーキサイトの産出量の地図ではないと思います。アルミニウムの生産量もオーストラリアが上位になると思うので、ウではないと思います。最後に、赤道付近の国がアルミニウムの生産の多くの割合を占めているのでイを選びました。

まずオーストラリアに着目して、オーストラリアが上位に入っていない地図ウは、ボーキサイトの産出国でもアルミニウムの生産国でもない、と判断している。明らかに間違いだと思う選択肢を消していく方法で、6つの選択肢を2つに絞ったが、最後に、赤道付近の国が上位にある地図イをアルミニウムの生産量を表す地図であると、誤った判断をしている。

大部分の生徒は正答を選ぶことができたが、その理由を説明させてみたところ、理解が十分でなかったり、誤解している部分があったりすることが分かった。また誤った解答を選んだ生徒についても、どこでつまづいているのかを把握することができた。

〔生徒の解答例〕

2年7組 番

右の問題は「2008 年度大学入試センター試験本試験地理B 第2問 問1」です。

右の問題を解くとともに、その解答を選んだ理由を教えてください。そのさい、図ア・イ・ウと一致させた理由を明確にしてください。

解答 3

理由

ボーキサイトの産出量をアにしたのは、オーストラリアやブラジルなどの熱帯の地域に多く分布しているからで、アルミニウムの生産量をアにしたのは、先進国や生産の中心地が集中しているからで、多く分布しているからで、アルミニウムの消費量にアにしたのは、日本はボーキサイトは産出していないためアルミニウムの生産もあまりしていないからで、消費量は多いと思うので、先進国は多く分布しているからです。

図1 次の図1中のア〜ウは、ボーキサイトの産出量、アルミニウムの生産量、アルミニウムの消費量のいずれかについて、その世界全体の量に占める割合の上位8か国を示したものである。図1中のア〜ウとボーキサイトの産出量、アルミニウムの生産量、アルミニウムの消費量との正しい組合せを、次ページの①〜⑥のうちから一つ選べ。 7

統計年次は2004年。
『世界国勢調査』により作成。

	①	②	③	④	⑤	⑥
ボーキサイトの産出量	ア	ア	イ	イ	ウ	ウ
アルミニウムの生産量	イ	ウ	ア	ウ	ア	イ
アルミニウムの消費量	ウ	イ	ウ	ア	イ	ア

②「工業の発達と立地」に関する問題

食料費、精密機械、鉄鋼のいずれかの業種の製造品出荷額について、日本全体に占める割合が上位20位までの都道府県を示した3つの地図を見て、それぞれの地図が表している業種を選ぶ問題である。それぞれの地図を選択する根拠としては、次のようなことが考えられる。

- ・食料品出荷額の上位20位までの都道府県を示した地図スを選択する根拠

北海道や鹿児島で食料品の生産が多いことに着目する。それ以外だと消費地である大都市を抱える都府県やその周辺が上位にある。

・精密機械出荷額の上位20位までの都道府県を示した地図サを選択する根拠

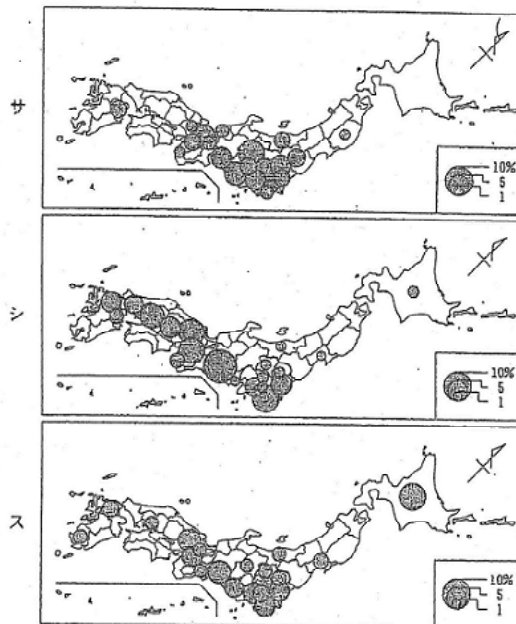
精密機械は高付加価値な製品であり、I Cの生産地の分布に類似している。大都市圏や交通の便の良い地域で生産されている。また、長野県（諏訪湖）周辺が産地として有名である。

・鉄鋼出荷額の上位20位までの都道府県を示した地図シを選択する根拠

鉄鋼の生産に必要な鉄鉱石と石炭は輸入に依存しているため、典型的な臨海型立地となる。鉄鋼は他の工業との関連が深いため、工業の盛んな太平洋ベルト地帯に分布している。

正答の④を選べた生徒の割合は68.4%（38名中26名）で、食料品出荷額のみ正しく選べた生徒が8名（21.1%）、鉄鋼出荷額のみ選べた生徒が3名（7.9%）であった。精密機械と鉄鋼の出荷額上位県の判断が、やや難しかったようだ。

問 5 次の図3中のサ～スは、食料品、精密機械、鉄鋼のいずれかの業種の製造品出荷額について、日本全体に占める割合が上位20位までの都道府県を示したものである。サ～スと業種名との正しい組合せを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。 11



統計年次は2002年。工業統計により作成。

図 3

	①	②	③	④	⑤	⑥
サ	食料品	食料品	精密機械	精密機械	鉄 鋼	鉄 鋼
シ	精密機械	鉄 鋼	食料品	鉄 鋼	食料品	精密機械
ス	鉄 鋼	精密機械	鉄 鋼	食料品	精密機械	食料品

（2007年大学入試センター試験「地理B」より）

正答だった生徒の記述としては、以下のようなものがある。

シの地図は太平洋ベルト付近に上位の県が集中しているので、鉄鋼はシだと推測し、スの地図は北海道の割合が大きいので食料品ではないかと推測し、精密機械は東京を中心に広く分布しているのでサの地図だと思いました。

まずスを見て、北海道が10%ほどの割合を占めているので、北海道の業種として多いと考えたのは食料品でした。次にシを見て、海に面している県が多くの割合を占めているので、船による貿易が多い鉄鋼だろうと考えました。最後に精密機械について、大都市圏が多くの割合を占めることからサと考えました。

前者は、太平洋ベルトに鉄鋼業が多いことや東京を中心とする地域に精密機械工業が多いことは知識として知っているが、その理由や関連性まで理解が深まっていない。後者は、鉄鋼業と貿易との関連には触れているが、原材料の輸入という点までは踏み込めなかった。

食料品出荷額のみ正しく選べた生徒の記述としては、次のような例があった。

精密機械は、中京工業地帯に広がっているので、シの地図。鉄鋼は、交通や使用する水の事などを考えるとサの地図で、比較的広い範囲に上位県があり、特に北海道や鹿児島なども入っているので食料品はスの地図を選びました。

シの地図をみて太平洋ベルトととらえることができず、また、交通の便やきれいな水といった要素を精密機械ではなく鉄鋼を結びつけるという誤りをしている。

また、鉄鋼出荷額のみ正しく選べた生徒の記述には、次のような例があった。

まず、スの地図は、関東地方中心に上位県があるので、京浜工業地帯があり、精密機械に適していると思いました。海に面しているので輸送にも困らないと思いました。シの地図は、中国から近畿地方に上位県が広がっていて、そこでは自動車工業が発達しているので鉄鋼だと思いました。

この生徒は、スの地図で、北海道などを見落とし関東近郊の県だけを見て、精密機械と判断している。鉄鋼業と、自動車産業などの他の産業との関連に着目したことは評価できる点である。

このように、鉄鋼業と精密機械工業の立地の特徴を正確に区別することが、生徒にとってはやや難しく、「エネルギー・鉱産資源」に関する問題に比べると、正答率は下がった。工業の立地についての理解がまだ不十分であることがわかり、その後の指導に生かすことができた。

〔生徒の解答例〕

2年7組 番

右の問題は「2007 年度大学入試センター試験本試験地理B 第2問 問5」です。

右の問題を解くとともに、その解答を選んだ理由を答えてください。そのさい、図サ・シ・スと業種を一致させた理由を明確にしてください。

解答 

理由

まず、スを見て北海道が10%程度の割合を占めているので、北海道での業種として多いだろうと考えたのは、食料品でした。次に、シを見て海に面している県が多い割合を占めていたのが、船による貿易が多い鉄鋼だろうと考えました。最後に精密機械について、大都市圏の多い割合を占めていることと考えると、

図5 次の図3中のサ・シ・ス、食料品、精密機械、鉄鋼のいずれかの業種の製造品出荷額について、日本全体に占める割合が上位20位までの都道府県を示したものである。サ・シ・スと業種名との正しい組合せを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。

図3

統計年次は2002年。工業統計により作成。

	①	②	③	④	⑤	⑥
サ	食料品	食料品	精密機械	精密機械	鉄鋼	鉄鋼
シ	精密機械	鉄鋼	食料品	鉄鋼	食料品	精密機械
ス	鉄鋼	精密機械	鉄鋼	食料品	精密機械	食料品

3 まとめ

(1) 成果

本事例では、地図を活用して、地図から読み取れることや考察したことを説明するという言語活動を取り入れた授業を実践した。

実践1と**実践2**では、複数の地理的事象の関連を読み取って記述したり、考察したことを根拠を明確にして説明したりするという活動を行った。いきなり難しいことや長い文章を書かせるのではなく、最初は簡単な課題から書かせたり使用する語句を与えたりして、段階を踏んで指導したことによって、生徒は達成感を得ながら、書くことに慣れ、徐々に自分なりの言葉で表現できるようになっていった。また、農業や工業などの産業にかかわる自然条件や社会条件について、多くの情報が記されている地図から必要な情報を読み取るという地理的な見方を身に付けることができた。

実践3では、地図が使われた問題を解くと同時に、解答の根拠について説明するという活動を行った。生徒は、自分のもっている知識を使って、分かるところから解いていた。今まで頭の中だけで漠然と考えていたことを言葉で表現することには、多少苦勞している様子もみられたが、大部分の生徒は、地図上の情報を読み取って、自分が解答を導いた理由を記述することができた。実際のセンター試験では、知識があいまいで判断に確信がもてなくても、分かるところを手がかりにしたり消去法を使ったりして正答を選ぶことが可能である。しかし今回の実践では、すべての地図について説明させたことで、知識の整理や確かな理解にもつながったと考えられる。また、生徒の記述内容から、基礎的・基本的知識の定着度や、地理的な見方・考え方ができているかを、より正確に把握することができ、事後の指導に生かすことができた。

(2) 課題

本事例では、通常の授業の中に生徒の言語活動を取り入れ、まずは書かせてみることから始め、ある程度の成果をあげることができた。しかし、生徒の記述について、きちんと評価をすることができなかった。ワークシートを提出させて点検し、必要に応じて添削したりコメントを加えたりするなどの指導は行ったが、ひとつひとつについて評価基準を設定し評価するには至らなかったことが反省点のひとつである。生徒同士で相互評価をさせる方法も、生徒の評価力をつけるだけでなく、記述力の向上にもつながる有効な手段であり、今後取り入れていきたい。

言語活動の充実を掲げ、生徒に言葉で表現する力を身に付けさせたいと考えたが、日本語としての表現力をどこまで要求するべきなのか、指導する側としても判断に迷う部分があった。生徒の記述は、日本語として文章になっていなかったり、文法や表現に誤りがあったりと、未熟な部分が多かった。国語科が中核となって表現力を育成する指導を行い、それが他の教科で生かせるようになることが望ましい。「地理」という科目における言語活動では、基本的な知識や地理的な見方、思考・判断など、言語で表現される内容が重要である。本実践を行って、言語活動を行うことが、むしろ、理解をより深く正確なものとしたり、筋道だてて考察し論理的に説明する力を付けさせたりすることにつながる、という効果を実感した。教師は、言語活動の意義を十分理解するとともに到達目標を明確にして指導にあたる必要がある。

また、「地理」の授業時間に余裕がなく時間的な制約が大きいという現状がある。本事例では、**実践1**と**実践2**は50分の授業内で計画したが、特に最初の実践では、生徒の書く力やスピードが予想できず、実際にはかなり時間がかかった。**実践3**は、各単元の復習と位置づけて授業中に行ったが、課題として自宅等で書かせることも可能である。繰り返し行うことで確実に書くことに要する時間を短縮できるため、全体の計画や進度を考慮しながら、短時間でも回数を多く設定していくことが、生徒の言語力向上のためには効果的である。

事例3 作業的な学習から言語活動への展開（地理B）

1 ねらい

新学習指導要領において、全ての教科にわたる改善事項として、言語活動の充実があげられている。このことは、地歴科、公民科を合わせた改善の具体的事項にも明記されている。また地理歴史科における改善事項の一つとして、地図の活用を重視することが求められている。

発表したりまとめたりするといった様々な学習活動を取り入れることは、現行の学習指導要領においても重視されているものの、時間的な制約の多い「地理B」の授業においては意識的、意図的に行われてきたとはいえない部分がある。また、地図の活用という点においても、実際に生徒が作業的・体験的な学習を行う時間は十分確保されていなかったのではないだろうか。

そこで、本事例では、言語活動の機会をできるだけ多く設ける工夫を試みた。「地理B」の地誌学習において、1つの小単位につき1テーマを設定し、ワークシートを工夫して、説明や発表、討論等の言語活動を20分程度で実践することとした。そしてその際、地図を活用し地理的技能を高めるため、データを地図化したりグラフ化したりする作業的な学習をあわせて行った。自作した地図等をもとに考察して文章にまとめることで、基本的な地理的技能を身に付けさせるとともに、資料活用能力や、思考力、表現力を育成したいと考えた。

なお、実践は第3学年を対象に行った。

2 授業実践

実践1 韓国の気候と文化

(1) 指導のねらい

- ・雨温図から韓国の気候の特色を読み取り、生活や文化と気候との関連について考察して、適切に表現する。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
20分 ※	・朝鮮半島や韓国の生活や文化について、知っていることをワークシートに記入する。 ・ソウル、東京、札幌の月別平均気温と降水量のデータから、それぞれの雨温図を作成する。 ・雨温図からソウルの気候の特色を読み取り、記入する。 ・韓国の気候と関連があると考えられる、生活や文化について考える。	・日本のデータは自分の持っている資料から探すよう指示する。	・雨温図から韓国の気候の特色を読み取り、気候と生活・文化との関連について考えて、適切に表現している。 【資料活用・表現】 【思考・判断】 〔ワークシート〕

※時間は授業時間50分の中で本実践にあてた時間を示している。他の実践も同様である。

まず、韓国や朝鮮半島の生活や文化について知っていることを書くように指示した。なかなか思い浮かばず、書き出せない生徒が多くみられたが、キムチ、チマ・チョゴリ、ハングル文字などをあげることができた。

次に、ソウルと東京、札幌の3つの都市の雨温図を作成させた。定規を使い丁寧に書く生徒が

多く、予想以上に時間がかかった。3 学年なので作業は早いのではないかと考えていたが、実際にはこのような作業にあまり慣れていないという実態が明らかになった。

雨温図からソウルの気候と東京の気候との共通点と相違点をあげ、それを踏まえて韓国の気候の特色を文章でまとめるように指示した。共通点としては「東京と同様に温暖である」ことがあった。相違点としては「夏の降水量が多い」ことをあげた生徒が多く、教師が意図していた「冬の気温が低く寒さが厳しい」ことをあげた生徒は少なかった。

その後、最初にあげた韓国や朝鮮半島の生活や文化のなかで、気候と関連があると考えられるものを記入させたが、あげることでできた生徒は少なかったため、後日解説を加えた。

今回は、生徒がまだ書くことに慣れていなかったため、なかなか文章を書きだすことができなかったことや、雨温図の作成にも手間取ったことから、予想以上に時間がかかった。適切な作業の分量についても検討する必要がある。

〔生徒が記入したワークシート例〕

地理演習プリント① 名前 _____

《朝鮮半島》

◇ 日本は、古くから朝鮮半島と交流をもっています。韓国や朝鮮半島の生活や文化について、知っていることを挙げてみよう。

整形してる人が多い
反日意識が強い(おじいちゃん、おばあちゃん世代)
徴兵が義務づけられている。

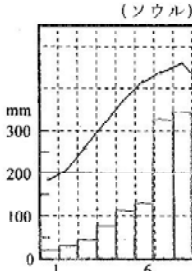
◇ ソウル・東京・札幌の雨温図を作成して、韓国の気候の特徴を考察してみよう。

※ ソウルの観測データ

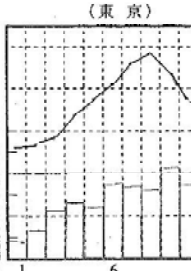
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全 年
平均気温℃	-2.5	0.3	5.2	12.1	17.4	21.9	24.9	25.4	20.8	14.4	6.9	0.2	12.2
降水量 mm	21.6	23.6	45.8	77.0	102.2	133.3	327.9	348.0	137.6	49.3	53.0	24.9	1344.2

(大韓民国気象庁 HP より)

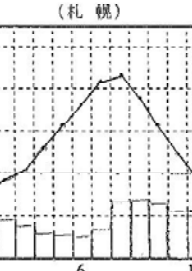
(ソウル)



(東京)



(札幌)



気候の共通点

気温は東京と同様に温暖である。

気候の相違点

7, 8月の降水量が非常に多い
日本より9月が湿気が多いが韓国は少ない

※したがって、韓国の気候の特徴は？

気温は温暖だが降水量は少ない。(差が大きい) 冬は乾燥

◇ このような気候の特徴から、朝鮮半島に見られる特有のものは何ですか。

実践2 中国における人口の集中

(1) 指導のねらい

- ・中国における人口集中の特徴について地図から読み取り、適切な資料を選択して人口集中の要因を考察し、表現する。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
20分	・中国の白地図で、人口密度の高い上位10か所の省、自治区、直轄市を塗りつぶす。 ・中国の人口分布の特徴を地図から読み取って記述する。 ・一人あたり地区総生産が上位10か所の省、自治区、直轄市を赤線で囲む。 ・人口密度と一人あたり地区総生産との間に関連があるか考える。さらに、人口密度が高い理由について、根拠となる資料を選んで説明する。	・根拠とする資料は、指定した地図帳のページに掲載されている主題図から選ばせる。	・中国における人口集中の特徴について地図から読み取っている。 【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート〕 ・中国における人口集中の要因について、適切な資料を選択して考察し、表現している。 【思考・判断】 〔ワークシート、観察〕

まず、中国で人口密度の高い上位10か所の省、自治区、直轄市を、白地図で塗りつぶす作業をさせた。時間が十分に確保できるなら階級区分図をすべてかかせたいが、**実践1**での反省から生徒の作業量を減らそうと考え、人口密度の高い地域がわかる階級のみに絞った。それでも生徒は省などの位置を探すのに手間取っていた。次に、作成した地図から読み取れる特徴を記入させた。生徒は、人口密度は中国東部の沿岸部で高いという特徴をとらえ、記入していた。

人口密度が高いのはどのような要因によるものかを考察させるため、ひとつの例として、同じ白地図に、一人あたり地区総生産の上位地域をかきこませて、関連性がみられるかどうか問いかけた。完全に一致はしないものの重なりもみられることがわかるが、生徒はそれをどのように表現したらよいのか、書きあぐねている様子であった。そこで「一人あたり地区総生産の多い地域は人口密度も高い傾向がある。」という記述例を示した。ワークシートの問いかけ方にも改善の余地があったと思われる。その後、地図帳に掲載されている中国のいくつかの主題図を活用して、他にも人口の集中にかかわる要因がないか考えさせた。生徒の記述をみると、沿岸部における工業化の進展の面からの説明以外に、気候や交通の面など様々な角度から説明しており、それぞれ自分なりの視点で考えた様子がみられた。

地理演習プリント②

《中国》

◇ データブックp.38を参照して、人口密度が高い省・自治区・直轄市の上位10カ所に、の模様を書き込もう。

※ ちなみに、日本の人口密度は、
_____ 338.7 人/km^2

◇ 中国の人口分布には、どのような特徴が見られますか。

東側の沿海部に
集中している。

◇ 人口が集中している理由を考えてみよう。

(1) データブック同ページから、1人あたり地区総生産が多い省・自治区・直轄市の上位10カ所を、赤色で境界線を囲んでみよう。

※ 人口分布と1人あたり地区総生産に、関連がみられますか？

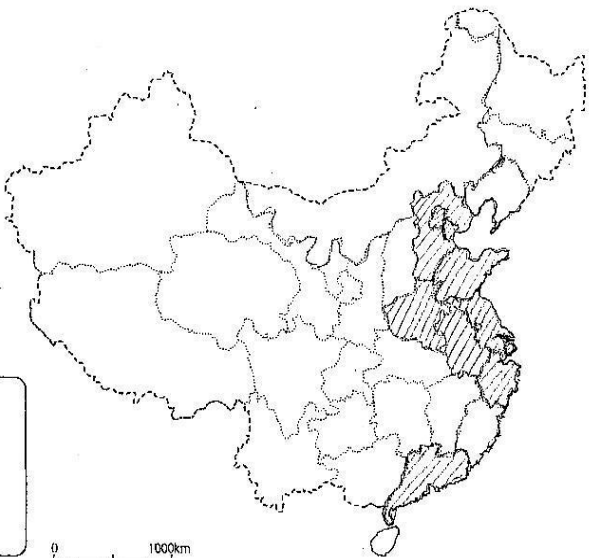
地区総生産が高い所は人口集中が見られる。

(2) 人口が集中している理由を、地図帳p.13～14の主題図を使って説明してみよう。

→ 説明に使う主題図… _____ (4 ページの(番号) ①) の図

東部の沿海部に港があり 原料や製品の輸出入が
しやすいため、工場が数多く立つことにより、人口が集中
する。

名前 _____



実践3 東南アジアにおける輸出品目の変化

(1) 指導のねらい

- ・ 東南アジア3か国の輸出品目の変化をグラフから読み取り、その理由について考察するとともに、それを裏付けるための適切な資料を選択する。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
	・ タイ、マレーシア、インドネシアの3か国について、2004年の輸出品目の円グラフを作成する。	・ 机間指導を行い、グ	・ タイ、マレーシア、イン

20分	・1989年のグラフと比較して、輸出品目にどのような変化があったか読み取り、ワークシートに記入する。 ・輸出品目が変化した理由を推測し、ワークシートに記入する。 ・自分の推測を裏付けるには、どのような資料やデータがあればよいかを考える。	ラフが正しく作成できているか確認する。 ・ビデオカメラとプロジェクタを使い、何人かの生徒の記述をスクリーンに示す。	ドネシアの輸出品目の変化をグラフから適切に読み取り表現している。 【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート〕 ・輸出品目が変化した理由について考察するとともに、それを裏付けるための適切な資料を選択している。 【思考・判断】 【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート、観察〕
-----	--	--	---

タイ、マレーシア、インドネシアの3か国の2004年における主要輸出品と輸出額に占める割合をグラフ化する作業を行い、それを1989年のグラフと比較して、どのような変化がみられるかを記述させた。生徒の記入状況はおおむね良好であった。

次に、そのように変化した理由や背景について考えさせた。この実践では、資料をみて考えるのではなく、自分の考えた結論を裏付けるためにはどのような資料やデータがあればよいかを考えさせた。生徒の記述としては次のようなものがある。



(円グラフを作成する様子)

理由・背景「海外（日本）の企業が進出してきたこと。」

必要な資料「国内の企業のうち、海外に本社のある企業の割合。企業に出資している人（企業の国籍別の出資額）」

理由・背景「工業化が進んだから」

必要な資料「工場の立地数の変化」

実際に入手できるかどうかは別にしても、自分の意見の根拠となるのはどのような数値であるのか、自分なりに考えることができた。資料から結論を導くだけでなく、結論から必要な資料を考えるという逆の発想をしたことは、生徒にとって新鮮だったようだ。生徒の思考の幅を広げることにつながる方法の一つと考えられる。

また、机間指導をしながら、ビデオカメラとプロジェクタを使って、何人かの生徒の記述をスクリーンに映して紹介した。発表の時間を節約するとともに、なかなか書くことのできない生徒を指導することができた。スクリーンに映された記述を参考に、自分の記述を補足する生徒も見られた。

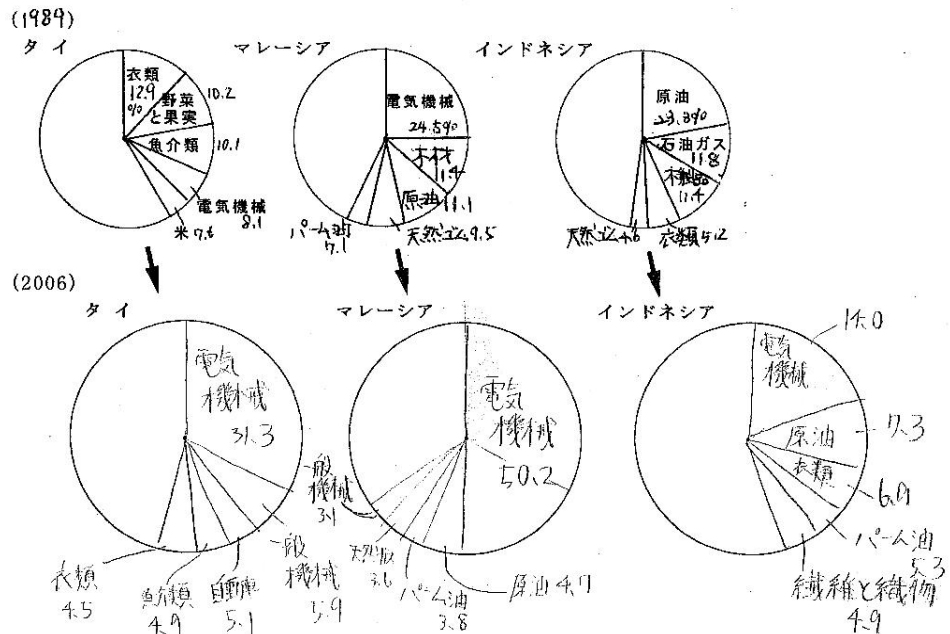
地理演習プリント③

名前 _____

《東南アジア》

- ◇ データブック p.132- を参照して、^{122/124}2006年のタイ・マレーシア・インドネシアの主要輸出品について、円グラフを作成しよう（下段）。

・主要輸出品と輸出額に占める割合



- ◇ 1989年と²⁰⁰⁴2006年を比較して、三か国の輸出品目には、どのような変化が見られますか。

電気機械の割合が大幅に増加し、資源・食料品・衣類などの割合が低くなった。

- ◇ 輸出品目が変化した理由を推測してみよう。

工業化が進んだから

発展 ほかにどのような資料・データが手に入れば、推測した変化の理由を立証できるだろうか。考えてみよう。

工場の数、立地、数々の変化

実践4 EU加盟国間の経済格差

(1) 指導のねらい

- ・ EU加盟国間の経済格差を地図から読み取り、経済格差がもたらす影響について考える。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
20分	・ EUの加盟国数と国名を確認する。 ・ EU加盟国の中で、1人あたりの国民所得が2万ドル未満の国を、凡例の模様で塗りつぶす。 ・ 1人あたり国民所得が2万ドル未満の国にはどのような共通点があるのか考える。 ・ EU加盟国間の経済格差が拡大するとどのような影響が出るか推測して記述する。	・ 地域だけでなく加盟年代や歴史にも着目させる。	・ EU加盟国間の経済格差を地図から読み取り、経済格差がもたらす影響について多面的・多角的に考察している。 【思考・判断】 〔ワークシート〕

現在のEU加盟国数と国名を確認させた後、白地図で加盟国のうち1人あたりの国民所得が2万ドル未満の国を塗りつぶさせた。そして、所得の低い国にはどのような共通点があるのか考えさせた。生徒からは「ヨーロッパ東部」という地域に着目した解答が出たので、東ヨーロッパ諸国がEUに加盟した年代はいつなのか、また、加盟年代が新しいのはどうしてなのか、というように生徒とやりとりをする中で、既習事項を確認するとともにその地域の歴史にも着目させた。



最後に、資料集等も使って、EUの政策を復習しながら（データブックを見て作業する様子）ら、経済格差の拡大がもたらす影響について考えさせ、記述させた。生徒の記述には次のようなものがあつた。

- ・ 人、モノ、資本の移動が活発になり、企業間の競争は激化して、特定の地域に産業が集中する。EUの中心や北欧諸国などとの経済格差はなかなか縮まらない。
- ・ 政治的、経済的に統合をめざすのが困難となる。経済的に裕福な国への出稼ぎが増える。裕福な国に産業や人口が集中し、過密化の一方で過疎化もおこる。出稼ぎが多く来る国では失業者が増える。
- ・ ユーロを単一通貨として使いにくくなる。

中には「ユーロの価値が変わる。」等の誤った認識をしている生徒も多く見られたため、ワークシートを返却する際に説明を加えた。

地理演習プリント④

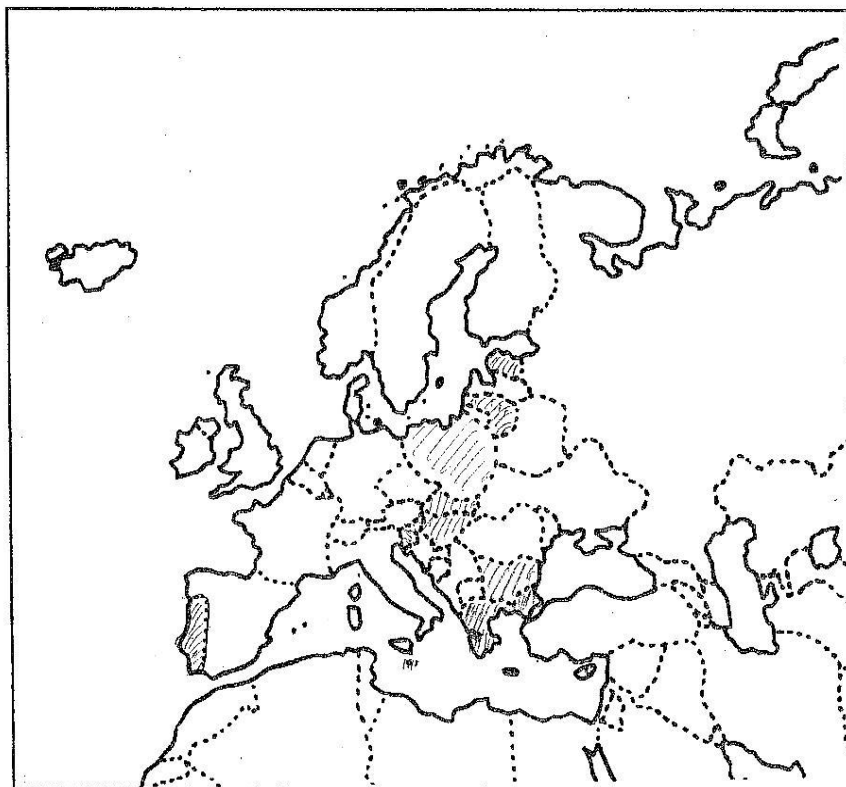
名前 _____

《ヨーロッパ》

- ◇ 現在、EUに加盟している国は何か国ですか。
(国名も確認しましょう)

27 か国

- ◇ データブックp.20～23をみて、EU加盟国のなかで1人あたり国民所得が2万ドル未満の国を挙げ、下の地図に  を書き込もう。



- ◇ EU域内の経済格差が広がると、どのような影響がでると推測されますか。

政治的・経済的統合をEUが目指すのが困難になる。
経済格差が広がる。経済的に裕福な国への移民が増える。 たいてい失業者が増える
これにより、人々の資本 ← 人口が経済的に裕福な国へ人口が集中
の移動が活発 産業等も集中 過疎・過密化が進む。

実践5 環日本海経済圏構想から考える日本とロシア

(1) 指導のねらい

- ・日本とロシアの資源共同開発の在り方について討論することにより、日本とロシアの関係を多面的・多角的に考える。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
20分	・環日本海経済圏に含まれる国を確認する。 ・日本の天然ガス輸入について、輸入国と輸入量に占める割合を表す円グラフを作成する。 ・ワークシートのサハリンプロジェクトについてのトピック記事を読み、資料集等も参考にして、日本はロシアと資源の共同開発をするべきかどうか考え、記述する。 ・日本とロシアの資源の共同開発の是非について話し合い、意見を発表する。	・様々な考え方を知ることが大切であることを伝え、活発な意見交換を促す。	・日本とロシアの資源共同開発の在り方について、積極的に話し合いを行い、多面的・多角的に考察している。 【思考・判断】 【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート、発表〕

最初に、環日本海経済圏に含まれる国を確認した。北朝鮮が抜けてしまったり、「環太平洋」と誤解してオーストラリアをあげたりするなど、正確な理解に至っていない生徒もみられたため、環日本海経済圏の目的や意義について再度説明した。

次に、サハリンプロジェクトを理解するための前提の一つとして、日本の天然ガス輸入の現状を表す円グラフを作成させた。そして、ワークシートに掲載したサハリンプロジェクトについてのトピック記事（市販の資料集から引用したもの）を読み、作成した円グラフや教科書、資料集等も参考にして、日本はロシアと資源の共同開発をすすめるべきかどうかについて考え、記述させた。その後、座席が近い生徒同士でグループを作らせ、話し合いをさせた。なかなか話し合いが始まらなかったため、「異なる意見を出し合うことで、幅広い見方や考え方ができるようになる」ということを伝え、どんな考えでもよいので積極的に話すよう促した。また、ワークシートのトピック記事だけにとらわず、様々な角度からの意見を出してみるよう指示した。やや遠慮がちではあるが、次第に活発に話し合いをする様子がみられた。本時はグループとしての結論を出すことまではせず、意見を交換して他者の異なる考えをよく聞くこととした。

最後に、何人かの生徒に意見を發表させた。あわせてグループでの話し合いの状況についても確認した。日本はロシアと資源の共同開発をすすめるべきかどうかについての生徒の意見は、「YES」が約7割、「NO」が3割ほどであった。サハリンプロジェクトについてのトピック記事からは、ロシアに対してやや批判的な印象を受ける



（話し合いの様子）

ため、「NO」という意見が多くなるのではないかと予想していたが、それに反して「YES」が多数を占める結果となった。

「NO」と答えた理由としては次のようなものがあり、トピック記事の記述に影響を受けて記述した生徒もみられた。

- ・開発が終わったあと、ロシアが利益を独り占めしてしまいそうだから。
- ・もっと確実に石油や天然ガスを輸出してくれる国に頼った方がよい。
- ・ロシアが約束を守らないから。日本にもっと利益があればやってもいい。
- ・他の発展途上国と開発した方がよい。

「YES」と答えた生徒は、トピック記事の内容だけでなく、資源に乏しい日本の実情や、地理的な位置関係、国際関係など、様々な面から考えて理由を述べていた。「YES」と答えた理由については次のようなものがあった。

- ・日本は資源が乏しいので、海外に依存するのは必然だから。
- ・日本とロシアの関係をよくするために必要。
- ・紛争などもおきるので、石油などの資源をなるべくいろいろな国から輸入できるようにしたほうがいいから。
- ・ロシアは日本と近距離なので、石油や天然ガスを獲得しやすい。
- ・ロシアは近いので、近くから輸入できた方がいろいろな製品が安く作れる。

ワークシートの記入状況を見ると、ほとんどの生徒が自分の意見とその理由を明確にすることができた。また、話し合いをしたときや発表の際に、自分と異なる意見を聞き、メモをとることができた。

物事の是非を判断する場合には、判断するための材料をなるべく多く集め、様々な角度から考えることが重要であることを重ねて指摘した。

地理演習プリント⑤

名前 _____

《ロシア》

◇ 環日本海 経済圏に含まれる国は何か国ですか。国名を挙げてみよう。

ロシア
日本
韓国
北朝鮮
中国

➡

5 国

◇ 日本の液化天然ガス輸入について、国名を記入してグラフを完成させよう。
(データブック p.88)

総輸入量
62,189 千トン

(データは 2006 年)

◇ 日本は、ロシアと共同開発をすすめるべきですか。

YES or NO

〔理由〕

もっと確実に石油や天然ガスを輸出してくれる方がよい。
 国に頼った方がよいと思いましたが、それに共同開発して
 安く買えた方がよいと思いましたが、

⇕

※ 反対意見も、書いておこう。

ロシアは日本から近距離だから確保しやすい。
 石油や天然ガスを
 安く買えるためにならなく色々な国から輸入している方がよい。
 日本を脅かすことが
 世界の情勢の悪化

(揮動ロシアの地図)

- ・主な資源の分布
- ・鉄道
- ・パイプライン計画
- ・日本企業の進出状況

サハリンプロジェクトに関するトピック

(内容)

サハリン沖の大陸棚に存在する石油資源の開発が1990年代から始まった。日本もこのプロジェクトに参加しているが、2006年以降、日本にとって難しい状況となっている。ロシアが突然、一つの鉱区の上り許可を取り消したり、日本に輸出される予定だった天然ガスが中国に輸出されることになったりしている。日本のサハリンプロジェクトは、転換点にたてられている。

〔「NO」という意見の生徒のワークシート例〕

地理演習プリント⑤

《ロシア》

◇ 環日本海圏経済圏に含まれる国は何か国ですか。国名を挙げてみよう。

日本

ロシア連邦

朝鮮民主主義人民共和国

大韓民国

中国

➡ 5 か国

(極東ロシアの地図)

- ・主な資源の分布
- ・鉄道
- ・パイプライン計画
- ・日本企業の進出状況

◇ 日本の液化天然ガス輸入について、国名を記入してグラフを完成させよう。
(データブック p.88)

総輸入量
62,189 千トン

(データは2006年)

◇ 日本は、ロシアと共同開発をすすめるべきですか。

YES or NO

〔理由〕

近から輸入できるようなので、

開発をしたほうがいいと思う

いかに豊かさを増やす。

⇕

※ 反対意見も、書いておこう。

地球温暖化が心配いふから。

名前 _____

3 まとめ

(1) 成果

本事例では、地図化したりグラフ化したりする作業を行ったあとに、それを活用して説明や発表、討論等を行うという、作業的な学習から言語活動へと展開する授業を実践した。その際、なるべく短時間でできる内容で、実践回数を多く設けることを心がけ、地誌学習の中で5回の実践を行った。

実践1で韓国の気候と文化の関連を、**実践2**では中国における人口集中の理由を、**実践3**では東南アジア3か国の輸出品目の変化の理由とそれを説明するために必要な資料について考えさせた。また、**実践4**でEU加盟国における格差拡大の影響を、**実践5**ではロシアとの資源共同開発の是非について考察するとともに話し合いをさせた。このように、各実践で扱う地域に応じて、作業内容や課題の設定を変えたり、思考パターンや学習活動に変化をつけたりして、生徒が飽きることのないよう工夫した。

実践の中で作成したグラフや地図は、いずれも教科書や資料集等に掲載されているものであり、これまでの授業であれば、単に見させたり印を付けさせたりするだけで済ませていたものであった。

しかし、生徒が自ら作業をすることで、それらが示す地理的事象をよりの確に把握することができ、地理的な見方の育成につなげることができた。

作成したグラフや地図を使って、考察したことを記述したり、自分の意見を述べたり話し合ったりする活動を繰り返したことで、情報を読み取る力や、思考力、表現力の育成に一定の成果をあげることができた。

生徒の感想でも、「グラフから情報を読み取る力がついた」、「説明を聞くだけでなく自分で考えたのでよかった」、「知識を覚えるだけでなく考察することも大切だということが分かった」といった肯定的な意見が大部分であった。また、今回の学習が、今後の自分の学習にどのように役に立つと思うかを聞いたところ、「地理の勉強をする際に『なぜこうなるのか』ということを考えながら進めていくことができる」、「自分の意見を述べるためにどのような資料が必要であるかを考えるのに役立つ」「地図やグラフにまとめられる」というように、地理的技能や、資料を活用する力、思考力等の面での効果を実感していることが分かった。

(2) 課題

生徒はグラフや地図を作成する作業にあまり慣れていなかったため、最初は教師の予想以上に時間がかかった。回数を重ねることで上達する部分もあるが、作業は必要なものだけに限って、なるべく少なくするよう心がけた。

考察することや、考えたことを文章で記述すること、発表や話し合いをすることは、十分な時間を確保して行いたいのが、実際にはあまり時間をかけることができず、常に葛藤があった。単元のねらいを踏まえて、それに沿ったテーマで学習課題を絞り込む工夫が大切である。また年度当初から年間計画の中に位置づけ、計画的に実践を行うことが必要である。

また、生徒のワークシートには、教師が想定していなかった様々な解答が書かれていた。ぜひ全員に紹介したいようなものや、解説する必要があるものもあったが、ワークシートを回収してチェックし返却するまでには一定の時間がかかり、難しかった。授業中にできるだけ机間指導を行い、さまざまな意見を早めに見つけて対応する必要性を感じた。また、より多くの生徒の意見をとりあげ紹介するために、**実践3**においては、生徒が記述している時に机間指導をしながら、何人かのワークシートをビデオカメラで撮影してスクリーンに映し、全員に紹介する方法をとった。このことは、書くことが苦手な生徒を指導するという点でも効果があった。これらの機器が使えるならば有効な方法の一つである。

生徒の多くは作業を含めて授業にはまじめに取り組むが、考えや意見を書くことに対して「苦手だ」、「面倒くさい」と感じ、なかなか取り組めない生徒もみられた。授業中に声をかけたり、ワークシートにコメントを書いたりするなど個別指導で対応したが、十分な効果をあげることができなかった。今後は、多様な生徒の実態を踏まえた、よりきめ細かい課題設定や発問、ワークシートの作成などを工夫したい。

おわりに

本研究の実践では、学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、地図を十分に活用するとともに、言語活動の工夫を取り入れた「地理」の指導の改善に取り組んだ。各事例の成果や課題から、次のような指導が授業改善の方策として有効であったことが分かる。生徒の実態に合わせて、各事例をアレンジしたり考え方を参考にしたりして御活用いただければ幸いである。

1 言語活動を授業に取り入れる

地図や資料から読み取れることや考察したことを適切に表現したり、根拠を明らかにして自分の意見を説明したりするなど、言語活動を実践することで、生徒の思考力、判断力、表現力を育成するだけでなく、知識・理解を確実に習得させることができた。言葉で表現するためには、もともとなる知識や自分なりの思考・判断に加えて、伝えようとする意欲も必要である。各事例から、言語活動は、生徒の確かな学力をはぐくむための有効な手段であることが分かった。教師は言語活動の意義や効果を十分に理解した上で、授業に取り入れていくことが大切である。その際、「地理」において育成すべき力やねらいを踏まえた上で、目標を設定し評価することが必要であろう。

2 段階を踏んだ継続的、反復的な指導を行う

言語活動を取り入れる際に、論理的な文章を書いたり説明をしたりする経験の少ない生徒に対しては、初めは使用する語句を示したり簡単な短い文を書かせたりするなど、段階を踏んで達成感を感じさせながら指導していくことが必要である。**事例1**や**事例2**においても、簡単なことから徐々に難易度をあげ、何度も繰り返し書かせることで、生徒は次第にコツをつかみスムーズに取り組むことができるようになった。生徒の実態や習熟度に応じて課題の設定を工夫し、継続的、反復的な指導に取り組むことが大切である。

3 多様な学習形態を取り入れる

各事例では、作図などの作業的な学習を個人で行うほか、グループ学習を実践したものもある。また、地図や資料から読み取れることや考察したことを個々のワークシート等に記述する活動、それらについて他者と話し合う活動、さらにグループでの話し合いの結果をクラス全員の前でプレゼンテーションする活動なども実践した。教師は教えるべきことは教えなければならない。しかし、情報を一方的に与えただけでは生徒の多様な力を伸ばすことができないこともある。知識・理解はもちろん重要であるが、生徒の様々な可能性を見いだしてはぐくむために、多様な学習形態を工夫し、取り入れていくことが必要である。

4 地図および地理情報システムの活用を図る

今回の学習指導要領の改訂において、地図を活用することは、地理歴史科全体にかかる改善事項である。さらに「地理」の新学習指導要領においては、内容の全体にわたる配慮事項として「地図や統計などの地理情報の収集・分析には、情報通信ネットワークや地理情報システムなどの活用を工夫すること」が示されている。複数の地理的事象を重ね合わせて関連性を読み取ったり、その原因を考察したりすることは、地理的な見方や考え方を培う上で不可欠な学習である。各学校の環境に応じて情報機器および情報通信ネットワークを活用し、状況によっては地理情報システムの考え方を取り入れてみるなどの工夫を図りたい。「地理」の指導における地図の活用については、様々な教材や手法を開発して取り入れていく余地がある。

高等学校における教科指導の充実
地 理 歴 史 科
新学習指導要領における
改善事項を踏まえた「地理」の指導

発 行

平成22年3月

栃木県総合教育センター 研究調査部

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070

TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>